

特 250

157

基督教

馬太傳福音書

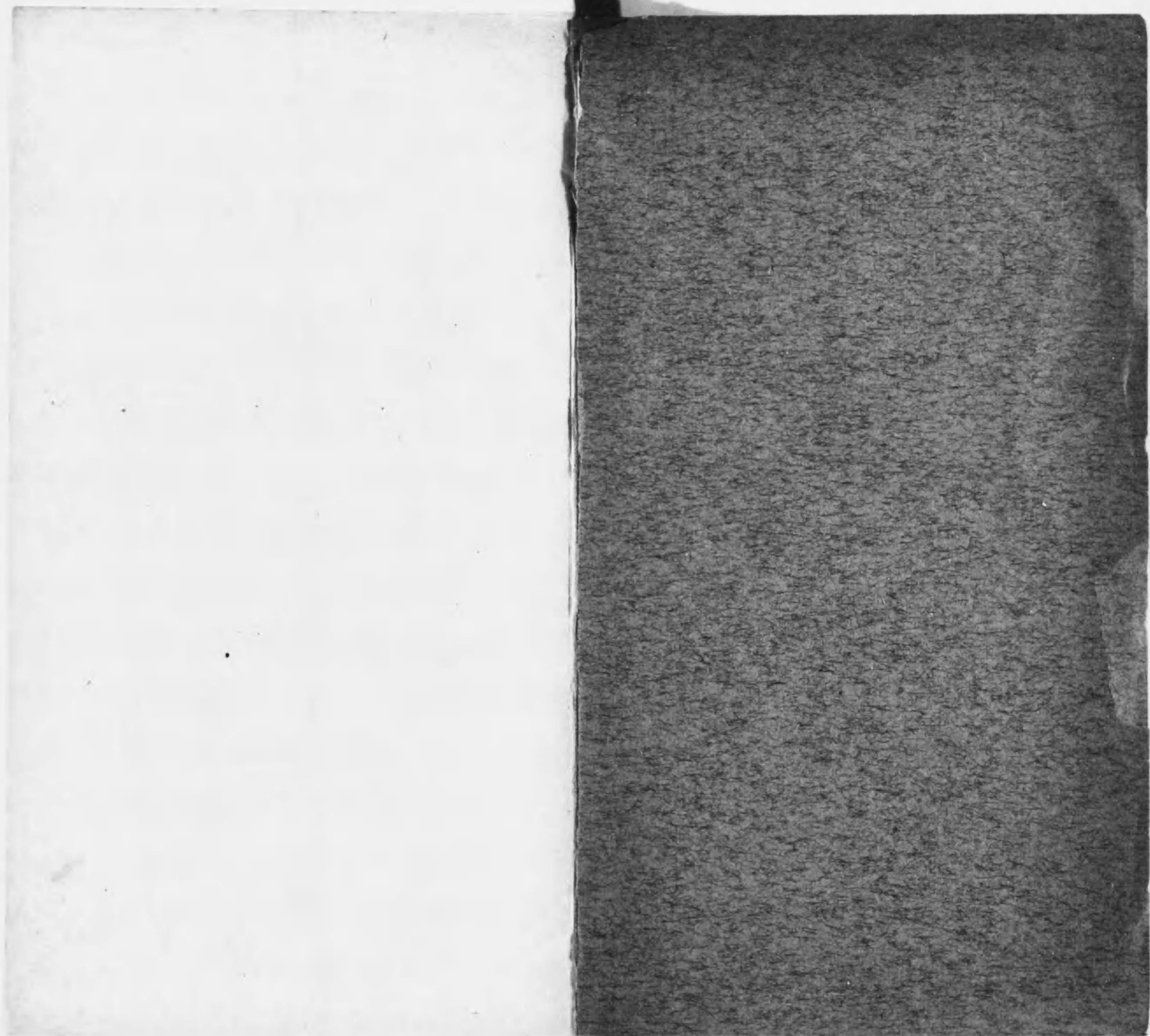
靈解

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5

始









特250  
157



馬太福音書

靈解





聖徳太子御詠言集

聖徳太子御詠言集

聖徳太子御詠言集



水の絶えざる

くめどく

泉あり

盡きぬ心の

賽五十八章十一節

泉かな

人渴かば

来て飲めよかし

来り飲めよ

約七章三十七節

渴く世の人



太一章十八節—二十五節 イエスの誕生

イエスキリストの誕生は左の如し、その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕めり。

イエスとはエホバの救と言ふ事で、キリストとは油を、がれし者、即ち王の意である、聖靈によりて孕めりとは、母鶏が卵をその翼にて覆ひつゝあるうちに雛が生るゝ其如く昔神の靈が水面を覆ひつゝあるうちに天地が生れた。(創一章二節)今又神の靈が、マリヤを覆ひつゝあるうちに、イエスが胎に宿り給ふた。

其孕みたること顯れたり、夫ヨセフは義しき人にして之を公然にするを好まず、密に離縁せんと思ふ、斯て、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『タビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るゝ事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり』

ヨセフは敬虔の念に厚き人なれば、孕みたる事の現れし時感情に任せて速断せず、神の旨は如何と思ひ回らした故に、神は天使を以て聖旨を示し給ふた。



彼、子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし、已が民をその罪より救ひ給ふ故なり。

天使は生れ給ふ子は神の民を罪より救ひ給ふが故に、エホバの救と名づけよと言つた。

すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の言ひ給ひし言の成就せん爲なり、曰く、『視よ處女孕みて子を生まん。』

賽七章十四節處女孕みて子を生むとの預言がマリヤによりて成就せられた。

ヨセフ寢より起き、主の使の命せし如くして妻を納れたり。

## 太二章一節―十八節 博士來拜

イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ『ユダヤ人の王とて生れ給へる者は、何處に在るか、我ら東にてその星を見たれば、拜せんために來れり』

博士等は、ペルシヤ地方の敬虔なる天文博士であつたと言ふ、彼らは世の腐敗を憂ひ救世者の出現を待望んで居た故に、神は星を以て其の出現を示し給ふたのである、神は敬虔なる者には、夢、まぼろし又天使によりて、其旨を示し給ふ。

ヘロデ王これを聞いて惱みまごふ、エルサレムの民も皆然り。

ヘロデは紀元前三十七年より四年を費してエルサレムの神殿を修繕せば、如何にも神に忠實なるが如くなるも、本妻と實子三人を殺せし惨忍の人であつた、彼は救世主の出現をきき已の地位を失はん事を恐れて惱みまごふた。

王、民の祭司長、學者らを皆あつめて、キリストの何處に生るべきを問ひ質す、彼ら言ふ『ユダヤのベツレヘムなり』こゝに於てヘロデ密に博士たちを招きて、星の現れし時を詳細にし、彼らをベツレヘムに遣さんとして言ふ『往きて幼兒のことを細にたづね、之にあはば我れに告げよ』

學者等は王の問ひにミカの預言を以て答へた(米五章二節)王が星の現れし時を問ふたのは、イエスの誕生の時を知らんためであつた。

彼等王の言をきゝて往きしに前に東にて見し星先だち往き幼兒の在す處の上に止る彼等星を見て歡喜に溢れつゝ家に入り幼兒の其母マリヤと共に在すを見平伏して拜し且寶の畫をあけて黄



金乳香設樂杯禮物を献けたり。

博士等は又星に導かれ遂に幼児の其母と共に在すに尋ね遇ひ歡喜に溢れ寶物を捧げて拜した耶二十九章十三節

太三章七節—十節　ヨハネの警告

ヨハネ、彼らに言ふ『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ、さらば悔改に相應しき果を結べ、汝ら『我らの父にアブラハムあり』と心のうちに言はんと思ふな、汝らに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。

ヨハネ言ふ誰が汝らに來らんとする神の刑罰を避くべき事を告げしや、神罰を逃れと思はば悔改に相應しき行を爲せ、又言ふ先祖の巧徳によりて其子孫たる者が救はるゝと思ふな神は此石の如き頑固な心の人々の中よりアブラハムの信仰の子を起し給ふ。

斧は早や樹の根に置かる、されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。今や審きの斧は罪人の足下に置かる、善行をせぬ者は審かれて地獄の火に投げ入れらるべし。

太三章十一節—十二節　ヨハネの預言

我は汝らの悔改のために水にてバプテスマを施す、されど我より後に來る者は我よりも能力あり、我はその鞋をさるに足らず、彼は聖靈と火にて汝らにバプテスマを施さん、手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め、穀は消えぬ火にて焼きつくさん。

人々はヨハネの能力ある説教を聞きて待望みしキリストにあらずやと考へたれば、ヨハネ之に答へて言ふ我か後より來る者が我に勝りて能力ある者で、我は其人の僕たるにも足らぬ者である我は悔改せし事のしるしとして水にて汚を洗ふ儀式のバプテスマを施すも、彼は火にて汚を焼きつくす聖靈のバプテスマを施し給ふ又彼は農夫が箕にて禾場をきよめて麥は倉に入れ、穀は火にて焼くが如く審を爲して世界をきよめ、善人は天國に入れ、悪人は地獄の火にて焼きつくし給ふと云つた。

太三章十三節—十五節　イエスの洗禮



イエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ、ヨハネ之を止めんとて言ふわれは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふかイエス答へて言ひたまふ『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは當然なり』ヨハネ乃ち許せり。

ヨハネのバプテスマは悔改めの表現式なれば、罪なきイエスには必要なきも模範的人物として出現し給へたれば、我等斯く義しき事を盡く成し遂ぐるは當然なりと言ひ給ふた。

イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給ひしとき、視よ、天ひらけ、神の御靈の、鴿のごとく降りて已が上にきたるを見給ふ、又天より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり。』

イエスは水より上りて已の使命に就いて天父の導きを祈り給ふた(路三章二十一節)天父は其祈に答へて神の靈を降して事業を成し遂ぐる能力を與へ、且つわが心に適ふ我が愛子なりと聖聲を以て激勵し給ふた、イエスはこの聖聲に勵され且つ此能力を以て救ひの事業に着手し給ふた。

### 太四章一節—十二節 イエスの靈戰

イエス御靈によりて荒野に導かれ給ふ。惡魔に試みられんと爲るなり。

イエスは天父より受け給ひし能力をためすために聖靈に導かれて荒野に出陳し給ふた。四十日、四十夜、斷食して、後に飢えたまふ試むる者きたりて言ふ『汝若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ』答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る』と録されたり。

イエスは靜に已を忘れて救の事業につき、日夜祈りて天父の聖旨を求め給ひしが、四十日後飢えたまふた、それを知つた惡魔は來りて言ふ、汝もし神の子ならば、石をパンと爲して飢を救ひ、然して汝の使命を果せと、人を救ふ爲に受け給ふた能力を以て已を救へと、神の能力の乱用をすゝめた、イエスこれに答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンにのみよるにあらず、神の口より出づるすべての言による(申八章三節)聖言を以て之を退け給ふたこと、に惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ『汝若し神の子ならば



己が身を下に投げよ、それは『汝の爲に御使達に命じ給はん、彼ら手にて汝を支へ、其足を石にうち當つること勿らしめん』と録されたるなり、イエス言ひ給ふ『主たる汝の神を試むべからず』とまた録されたり。

悪魔イエスをエルサレムの宮殿の絶頂に立たせて言ふ汝もし神の子ならば、此の群衆の面前にて己が身を下に投げよ、『神は天使に命じて手にて汝を支へ給はん』(詩九十一篇十二節) 然らばこれを目撃せし群衆は汝を『來るべきメシヤ』と信せん(馬三章一節) 然して汝の使命を果せと、冒險の近路をすゝめた、過つて危険に陥る時、神の保護に信賴して憂慮せざるは信仰なれども故意に危険を犯して神の救を望むは、神を試むる事である、故にイエスは『神を試むべからず』と録さる(申六章十六節) 聖言を以てこれを退け給ふた悪魔又イエスを最高き山につれゆき、世の國と、其榮華とを示して言ふ汝もし平伏して我を拜せば、此等を皆なんちに與へん爰にイエス言ひ給ふ、サタンよ、退け『主なる汝の神を拜し、唯之にのみ事へ奉るべし』と録されたるなり。

悪魔はイエスを高き山に連れ行き、世界と其榮華とを示して汝もしわが前に來り瞬間われを拜せば、之らを皆汝に與へん、汝此等を得て然して汝の使命を果せと、權道をすゝめた然れどイエスは主たる汝の神を拜し唯これにのみ事ふべしと録さる(申六章十三節) と聖言を以てこれを退け給ふた。

こゝに悪魔離れ去り、視よ、御使たち來り事へぬ。

イエスは聖靈の劔を以て三回悪魔の誘惑を退け給へば天使が來り事へた、第一の試みは肉慾、第二は誇り第三は眼の慾である(約一ノ二章十六節) 昔エバはこれを食ふて悪魔の性質を受けた、イエスは聖靈の劔を以てこれを退けて悪魔に勝利を得給ふた。

### 太五章三節—十二節 天國民の特質

幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり。

心の貧しきとは神に就て貧しき事を悟りて神の前に謙遜なる者を言ふ、其の人は天國を受けつぐ者で、神の國の半ば既に彼の物で未來に於て完成せらる。

幸福なるかな悲しむ者、その人は慰められん。



悲しむとは己の罪が、己の心を傷め人を苦しめ、神を怒らせ、遂にイエスを十字架につくるに至りし事を悟りて悲しむ者を言ふ其人は罪赦されて慰められん。

幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

柔和なる者とは温和寛容にして敬神の念に富み、人と和ぎて争はず、大海の如き心を有する者を云ふ、其人は眞の成巧を見る、

幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

義に飢え渴く者とは義しい事を渴望する者を言ふ、名望や、權勢や、財寶を渴望する者は飽く事を知らねど、義しい事を渴望する者は満足する、伯夷は仁を求めて仁を得たれば何をかうらみんと、孔子は言つた人は人の得べきものを得たならば満足するものである。

幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。

憐憫ある者とは人を憫む心が自由意志より生ずる者を言ふ、斯くの如き者は己も憫みを受く(詩十八章二十五節)

幸福なるかな心の清き者、その人は神を見ん。

心の清き者とは、愛ある者を言ふ(提上一章五節) 愛なき者は神を知らねど(約一ノ四章八節) 愛ある者は愛なる神を實驗によりて悟る。

幸福なるかな平和ならしむる者、其人は神の子と稱へられん。

平和ならしむる者とは先づ己が神と和ぎ、又人を平和に導く者を言ふ、かゝる者は神の性を受けし者なれば神の子と認めらる。

幸福なるかな義の爲に責められたる者、天國は其人のものなり。

義の爲に責めらるゝとは義しき道を歩む爲に迫害せらるゝを言ふ、迫害せられても、終りまで忍ぶ者は天國をわが有とする。

我が爲に人、汝らを罵り又責め、詐りて各様の悪事を言ふ時は、汝ら幸福なり、喜び喜べ天にて汝らの報は大なり。

キリストの爲に辱めを受くるに足る者とせられしを喜べ、キリストの患難の欠けたるを補ひし事を感謝して、神の譽を望め。



### 太五章十三節—十六節 天國民の職務

汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何を以てか之に鹽すべき、後は用なし外に捨てられて人に踏まるゝのみ。

弟子の職務は鹽が魚類の腐敗を止むる如く、世の腐敗を止め、又鹽が已が姿を失ふて食物に味をつくる如く已を犠牲にして人を愛する事である。

汝らは世の光なり、山の上にある城はかくるゝことなし。

弟子の職務は、光が暗を照すが如く正義を罪惡の世に示す事である、又港にある燈臺が暗黒の海を渡る船人に港を示す如く、世の燈臺となりて暗黒に迷へる人々に天國の港を示すことである、又弟子らの言動は山上の城がかくるゝ事を得ざるが如く我らはキリストの書なれば世人に讀まるゝ事を知れ(哥後三章三節)

又人は燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく、斯くて燈火は家にある凡ての物を照すなり、斯の如く汝らの光を人の前にかがやかせ、これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいま

す汝らの父を崇めん爲なり。

燈火とは聖言である(詩百十九篇百五節)燈火のつごめは燈火を燈臺の上に置きて家にある物を照らす事である、其如く弟子のつごめは聖言を己が身に實行して神の榮光を發揮し人々をして天父をあがめしむる事である。

### 太五章十七節—十九節 律法と預言の完成

我律法と預言を毀つ爲に來れりと思ふな毀たんとて來らず反つて成就せん爲なり。

イエスの改革は律法と預言を廢する爲でなく、イエスの死と甦により罪人を救ふて律法の要求を充し、斯くして律法の効能を全ふする爲である。

### 太五章二十節 天國民の正義

我汝らに告ぐ、汝らの義、學者、パリサイ人に勝らずば天國に入ること能はず。

天國に入る者の義は學者やパリサイ人の義に勝ぐれねはならぬと、太五章二十一節—十六章



十八節に於て學者やパリサイ人の義と天國民の義とを示し給ふた。

(十四)

### 太五章二十一節—二十二節 殺人

古への人に『殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし』と云へることあるを汝等きけり、然れど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は審判にあふべし、また兄弟に對ひて、愚者よと言ふ者は地獄の火にあふべし。

古人は殺人を禁するも、イエスはそれのみでなく怒る事も馬鹿者と言ふ事も、又わる者と言ふ事も禁じ給ふ。

### 太五章二十三節—二十六節 和睦

汝もし供物を祭壇に捧ぐる時、そこにて兄弟に怒まる、事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し然るのち來りて、供物を捧げよ。  
兄弟間に生せし隙を和睦するは、供物を神に捧ぐるに勝る。

汝を訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ、恐くは、訴ふる者なんちを審判人にわたし審判人は下役にわたし、遂に汝は獄に入れられん。

世に居るうちは、債主と負債者が裁判所へ往く途中にあるが如く、なれば和解する事を得る故に時の過ぎ去らぬうちに和解せよ。

### 太五章二十七節—三十一節 姦淫

『姦淫するなかれ』と言へることあるを汝らきけり、然れど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。

汚れたる情慾を起して女を見る者は、女に對して既に惡を行ふたのである。

もし右の目なんちを躓かせば、扶り出して棄てよ、五体の一つ亡びて全身地獄に投げ入れられぬは益なり、もし右の手なんちを躓かせば、切り捨て捨てよ、五体の一つ亡びて全身地獄に往かぬは益なり。

目や手がある爲に罪に誘はる、ならば、大切な目でも腕でも切り捨てねばならぬ、不具にて

(十五)



も生命に入るは福なるによる。

(十六)

また妻をいだす者は離縁状を與ふべしと云へることあり、されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり、また出されたる女を娶る者は姦淫を行ふなり。

妻を出す時は離縁状を與ふべしとは一時の感情に激して、みだりに妻を出すことを妨ぎ、又出された女を他人が娶りし後、出せし者が再び娶らんと云はざる爲である。

モーゼが離縁する事を許せしは、當時の人が無情なるが爲であつた、イエスは姦淫のためならば離縁の條件が成立するも、然らざる限りは離縁してはならぬと言ひ給ふた(太十九章八節)

### 太五章二十三節—三十七節

誓

約

古の人にいつはり誓ふなかれ、なんちの誓は主に果すべしと言へり事あるを汝ら聞けり、されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな唯然り然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり。

偽りの誓をするな、又誓へば必ず果せとの規則を設くるは人に眞實なき爲である、人に眞實あれば誓ふ必要がない唯斯くする斯くせぬと言へばよい。

### 太五章二十八節—四十八節

愛

敵

目には目を、齒には齒をと云へることあるを汝ら聞けり。

目は目を以て償ひ、齒は齒を以て償はねばならぬ法律あり(出二十一章二十四節)  
されど我は汝らに告ぐ惡しき者に抵抗ふな。

惡しき者と争ふは愚、宜しく愛を以て化せよ。

人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。

奴隸が惡しき主人に於ける教訓。

汝を訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。

負債者が惡しき債主に於ける教訓。

人もし一里の公役を強ひなば共に二里往け。

(十七)



人民が悪しき政府に於ける教訓。

なんちに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。

富者が悪しき貧者に於ける教訓。

なんちの隣を愛し、なんちの仇を憎むべしと言へることあるを汝らきけり。

隣人を愛せよとは神の言で（利十九章十八節）仇を憎めとは學者の言ある。

されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ、これ天にいます汝らの父の子とならんためなり。

仇を愛し仇のために福を祈る者は天父の子である。

天の父はその目を悪しき者の上にも、善き者のうへにも昇らせ、雨を義しき者にも、義しからぬ者にも、降らせ給ふなり、なんちら已を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや、然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

天父の子たる者は天父の模範に倣ふて、善人も悪人も愛せよ。

太六章一節 已が義

汝ら見られん爲に已が義を人の前にて行はぬ様に心せよ、然らずば、天に居す汝らの父より報を得じ。

人に褒められん爲に善をなす者は父より報を得ぬ。

太六章三節四節 施 濟

施濟をなすとき右の手の爲す事を左の手に知らすな、是はその施濟の隠れん爲なり。

太六章六節一十五節 祈 禱

汝は祈る時、已が部屋に入り、戸を閉ちて隠れたるに在す汝の父に祈れ。然らば隠れたるに見給ふ汝の父は報ゆ給わん然らば斯く祈れ天に在す我らの父よ。

天とは聖き意にして榮光と稜威を言ふ、在すとは神は宇宙に遍在し給ふ（耶二十三章二十四節）天父は萬物の根元にして愛の泉源である、父が子に於ける如く天父は我らを愛し給ふ、ギリシヤの詩人アラトスは神は我らの父にして萬民は神より出たり我らは其裔なりと



言つた（使十七章二十四節）

願くは、聖名の崇められん事を。

全世界の人が神に身霊を捧げて服従せん事を。

聖國の來らんことを。

全世界に神の政治の行き渡らん事を。

聖意の天のごとく、地にも行はれん事を。

全世界に神の聖意が成就せん事を。

我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。

われらの靈肉に必要な物を與へ給へ。

我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。

われらに罪を犯せし者の罪を赦せし如くにわれらの罪を赦し給へ。

我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ。

惡魔の試こころに遇わぬやうに惡の力より救ひ給へ。

### 太六章十七節十八節 斷 食

斷食する時、頭に油をぬり、顔を洗へ、これ斷食することの人に顯れずして、隠れたるに在す  
汝の父にあらはれん爲なり。

### 太六章十九節—二十一節 天の寶

汝ら已が爲に財寶を地に積むな、此處は虫と錆とが損ひ、盜人うがちて盜むなり、汝ら已が爲  
に財寶を天に積み。

俗人は財産を已が寶とするも宗教家はエホバを已が寶と（申十章九節）して愛と義の寶を  
天に積む。

汝の財寶のある所には汝の心もあるべし。

人は財寶であると思ふ其物の處に心が常に在るものである故に、財寶と思ふ其物によりて  
其人の品性が定まる。



太六章二十二節—二十三節 心靈の盲目

身の光は目なり、この故に汝の目あきらかならば全身あかるからん、然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん、もし汝の内の光、闇ならばその闇いかりぞや。

目の悪しき人は物を見分ける事が出来ぬ斯くの如く心の暗き人は善悪を辨ふる事が出来ぬ即ち善のうるはしき事も、愛の貴き事も、罪の悪むべき事も罰の恐るべきことも分らぬ。

太六章二十四節 二人の主人

人は二人の主に事ふること能はず、或は、これを憎み、彼を愛し、或はこれに親しみ、彼を輕しむべければなり、汝ら神と富とに兼事ふこと能はず。

臣たる者は二人の主君に忠義を盡す事が出来ぬ、其ごとく人は二人の主に事ふる事が出事ぬ故に已か事ふべき主を選べ。

太六章二十五節—三十四節 思ひ煩ふな

この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと体のことを思ひ煩ふな、生命は糧にまさり、体は衣に勝るならすや。

何を食ひ何を飲んで生命を養はんと生命の事を思ひ煩ふな、又何を著て体を保たんと体の事を思ひ煩ふな、大切なる生命を賜ふ神は生命を養ふ糧をもあはせて賜ふ神である、又大切なる体を賜ふ神は体を保つ衣をもあはせて賜ふ神であることを信せよ、然らば思ひ煩ふ事はない。

空の鳥を見よ、播かず刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ、汝らは之よりも遙に優る、者ならすや。

鴉は朝霜を戴きて巢を出で、夕に月を戴きて歸る、神は彼が働く處に糧を備へ給ふ(詩百四十七編九節) 神の愛は鳥にまで及ぶ況んや人をや。

汝らの中たれか思ひ煩ひてその生命を寸陰も延べ得んや。



人が如何に思ひ煩ふも神の働きに屬する事は如何ともする事を得ぬ、然らば神の働きに屬する事は神に任せ、人の働きに屬することを爲して満足せよ。

又なにゆえ衣のことを思ひ煩ふや、野の百合は如何して育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき、今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へは、まして汝らをやああ信仰うすき者よ、さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな、是みな異邦人の切に求むる所なり、汝ら天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給ふなり、まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。

百合を思ひ見よ、これは今日野にありて明日、爐に投げ入れらるゝにあらずや、然るに神は斯く美はしく裝せ給ふ、神の愛は草に迄及ぶ況んや人をや、是故に先づ神の國即ち神がわが心を支配し給はん事と、神の義即ち太五章二十節、六章十八節を求めよ然らば生活に必要なものはそれに加へて與へ給ふ。

この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん、一日の苦勞は一日にて足れり。

明日は地震が起るか、火山が破裂するか、自分の身体が生命を失ふか此等の事は神の働きなれば神に任せよ、然して其日與へられし苦勞を爲せ、然らば思ひ煩ふ事なからん、萬象は神の表現にして見へざる神の性格を現す即ち空の鳥や野の百合によりて神の愛を知り天体や地球によりて神の能力を認め萬象の裡面に於ける神の働きのよりて神の智を悟る詩十九篇一節羅一章二十節。

太七章一節―二節 人を審くな

なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり、已がさばく審判にて已もさばかれ、已がはかる量にて已も量らるべし。

自分が人に審かれざることを欲せば人を審くな、自分が人に對するに酷なるか、寛なるか其量によりて人にも亦量らるゝと知れ。

太七章三節―五節 已か梁木



何故兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか、視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや、偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け。

塵とは小過の事で、梁木とは大過の事である、己の大過を反省せずして人の小過を諫むるは己の罪を重くする事である（羅二章一節）先づ己の大過を悔改よ、然らば己の善良なる感化にて人を悔改に導き得ん。

### 太七章六節 要 求

聖なるものを犬に與ふるな、又眞珠を豚の前に投ぐるな。

犬は己が吐きたる物を食ひ、豚は泥の中に伏すと云ふ諺あり（彼後二章二十二節）犬や豚の如き人に聖き神の聖言を與ふるは益なくして害ある。

求めよ、然らば與へられん、尋ねよ、然らば見出さん、門を叩け然らば開かれん、凡て求むる者は得、尋ぬる者は見出し、門を叩く者は開かゝるなり、汝ら惡しき者ながら、善き賜物を其子ら

に與ふるを知る、まして天に在す汝らの父は求むる者に善き物を賜はざらんや、然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。

尋ねるとは見出すまで尋ねる事で熱心の意、叩くとは内より開かる、まで叩く事で忍耐の意、神の國に入らんと思ふ者は熱心と忍耐とを以て求めねばならぬ、罪ある肉体の父ですら、其子の求めに應ずる況して慈愛に富み給ふ靈魂の父は、求むる者に善きもの與へ給ふ求めて與へらる、事を欲ふ者は亦人の求めに應せよ。

### 太七章十三節—十四節 天國と地獄

狭き門より入れ、滅亡にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし、生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少し。

生命に到る門は狭ければ、罪の重荷を悔改め、困苦を忍んで入らねばならぬ（路十三章二十四節）又生命に到る路は小さければ見失はぬ様に注意せよ、滅亡に到る門は大きく其路は廣ければこれに入る者多し、生命とは永遠に生きる神の生命にして、滅亡とは無限に受



くる地獄の苦痛である。

(二十八)

### 太七章十五節—二十節 案内者

偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は奪ひ掠むる豺狼なり、その果によりて彼らを知るべし、いばらより葡萄を、あざみより無花果をとる者あらんや、斯くすべて善き樹は善き果を結び悪しき樹は悪しき果を結ぶ、然らば其果によりて彼らを知るべし。

天國に入らんと欲ふに案内者が悪ければ地獄に往く故に、善き案内者を撰ばねばならぬ、善き案内者を選ぶには人の姿によらで人の行によりて知れ。

### 太七章二十一節—二十三節 天國に入る者

我に對ひて主よ主よと云ふ者ことごとくは天國に入らず、たゞ天に在す我が父の御意を行ふ者のみ、之に入るべし。

預言する者も、奇跡を行ふ者も能力ある業をなす者も天國に入れられぬ、此れに入る者は

天に在す父の聖旨を行ふ者のみである。

### 太七章二十四節—二十七節 安全の家

然らば凡て我がこれらの言を聞いて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人にたとへん、雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。

家があれば風雨を防ぎ寒暑を凌ぎて其身を安全に保つ事を得る(賽四章九節)イエスはわがこれらの言、大五章十七節七章十三節を聞いて行ふ者は磐の上に家を建て、往む人の如くである、大雨のため流れ、漲るが如き災難に遇ふとも大風の如き困難が來るとも、平安の家は倒るゝ事がない、そは磐の如きキリストの言を基礎とするによる。

すべて我がこれらの言葉をきゝて行はぬ者を、砂の上に家を建てたる愚なる人にたとへん、雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし。

イエスの教をきくのみで實行せぬ者は、砂の上に家を建て、往む人の如きである、一朝大雨の爲流れ溺るが如き災難や、大風の如き困難に遇へば平安の家は倒る、そは砂の如き已

(二十九)



を基礎とするによる。

(三十)

## 太八章二節―四節 癩病人

視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜して言ふ『主よ、御意ならば、我をきよくなし給ふを得ん』

ユダヤ人は癩病を天刑と思ふて社會より退け、又裂けし衣を着て、手にて口を覆ひ路上人に遇へは不潔と呼ばねばならぬ事であつた故に、此の癩病人はわが如き汚れし者はイエスの聖意に適はぬ者であると謙遜になり然れどもし聖意に適ふ時はイエスの能力はわれをきよく爲給ふ事を得ると信仰を起した。

イエス手をのべ、彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、癩病ただちに潔れり。

イエスは彼の謙遜と信仰を見て、わが意に適へりきよくなれと一言にて癒し給ふた。

## 太八章五節―十二節 百卒長

百卒長きたり、拜していふ『主よ、わが僕、中風を病み、家に臥しゐて甚く苦しめり』

此百卒長は善き人にて、人を愛し又ユダヤ人の爲に會堂を建てた(路七章五節)此人イエスのカペナウンに來り給ひしをき、僕の病を癒し給はん事を願はんと思へども犬と呼ばる、異邦人が神の子の前に出づるは恐れ多しとて、ユダヤの長老を頼み、イエスに願つた(路七章三節)

イエス言ひ給ふ『われ往きて醫さん』百卒長こたへて言ふ『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者なり、たゞ御言のみを賜へ、さらば我が僕はいえん。』

百卒長はユダヤの友人を以て、主が何處に在しても、一言を賜ふたならばわが僕は癒へんと言つた(路七章六節)これを靈的信仰と言ふ。

イエス聞きて怪しみ、從へる人々に言ひ給ふ『誠に汝らに告ぐ、斯る篤き信仰はイスラエルの中に、一人にだに見しことなし、又なんぢらに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そにて衷哭切齒することあらんイエス百卒長に『ゆけ、汝の信するごとく汝になれと言ひ給へば、この

(三十一)



時僕いえたり。

(三十一)

イエスは異邦人が斯く靈的信仰を以て、現世に於て恵みを受け來世に於て永遠の幸福に入るを喜び給ひしが、それに引換へて神の選民たる同國人が物質觀念に捕はれて、現世に於ては恵みを拒み來世に於ては外の幽暗に追ひ出さるゝ事を思ふて歎き悲しみ給ふた

### 太八章十四節—十五節 ペテロの姑

イエス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しをるを見、その手に觸り給へば、熱去り女おきてイエスに事ふ。

人は引力を認むるも、月が潮をひき、地球が石をひく其の理由は解らぬ、其如くイエスの奇蹟も神の能力なる事を認むるも、其理由は分らぬ。

夕になりて、人々、悪魔に憑かれたる者をおほく御許につれ來りたれば、イエス言にて靈を逐ひいだし病める者をごとく醫し給へり。

昔神は言にて光を造り(創一章三節)又言にて世界を造り給ふた(來十一章三節)今イ

エスは言にて病を癒し給ふた。

これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負ふ』と言はれし言の成就せんためなり。

イエスは自らわれらの患ひを引き受け我らの病を負ひ給ふた(賽五十三章四節)故にイエスの同情は活動がごもなひ、イエスのあはれみは勞力がごもなふ。

### 太八章十九節—二十二節 弟子の心得

一人の學者きたりて言ふ『師よ何處にゆき給ふごも、我は従はん』イエス言ひたまふ『狐は穴あり空の鳥は巢あり、然れど人の子は枕する所なし』

イエスは此人が世の榮華を望むを知り給へば、我れに従ひ來るも汝の志望を達する事を得ぬ、われは狐や鳥にも劣る生涯を送る者であると言ひ給ふた。

また弟子の一人いふ『主よ先づ往きて我が父を葬ることを許したまへ』イエス言ひたまふ『我に従がへ、死にたる者にその死にたる者を葬せよ』

(三十三)



此人は天の榮光を望めども、先づ往きて父を葬りし後従はんと言つた、

イエス言ひ給ふ『愆と罪に死にし者(以二章一節)に死にたる父葬をらせ、汝は往きて神の國を傳へよ』(路九章六十節)イエスは孝道を教へ給ふも、場合によりては大義親を滅すと言ふ諺の如く絶対命令を下し給ふ事あり。

### 太八章二十三節—二十七節 航海

かくて舟に乗り給へは、弟子達も従ふ、視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽はるゝばかりなるに、イエスは眠りぬ給ふ。

信仰の生涯は救の舟に乗りて航海するが如く、天國の彼岸に着する迄は危険に遇ふ事あらん、即ち暴風の如き災害が起り、荒浪の如き苦難に遇ひ、救の舟も沈んとして、神に見捨られたるにあらずやと思ふ事あらん、是は神が信仰を試み給ふと知れ。

弟子ら御許にゆき、起して言ふ『主よ、救ひたまへ、我らは亡ぶ』

弟子達は狼狽してイエスを起し、われらが溺るゝも顧み給はぬかと言つた(可四章二十八

節)弟子たちは眠り給ふイエスは守り給はぬと思つたのである(詩百二十章四節)

イエス彼らに言ひ給ふ『なにゆえ懸するか信仰うすき者よ』乃ち起きて、風と海とを禁め給へば大なる風となりぬ人々あやしみて言ふ『こは如何なる人ぞ、風も海も従ふとは』

弟子等は危険より救はれし實驗によりて信仰を厚くした。

### 太八章二十八節—三十四節 ガダラの悪鬼

イエスがガララの地に往き給ひし時悪鬼につかれたる者これに遇ひ叶ひて云ふ『神の子よ我ら爾ど何のか、わりあらん、未だ時至らぬに我らを責めんとして此處に來り給ふか』

悪魔は末世にて責めらるゝ事あるも現世にてはないと思ひしがイエスの出現は悪魔の業を毀つ爲であつた約一書三章八節

遙にへだたりて多くの豚の一群食しむたりしが、悪鬼ども請ひて言ふ『もし我らを逐ひ出さんとならば、豚の群に遣したまへ』

悪鬼が斯く請ひしはガダラ人を使つてイエスを追ひ出す計略であつた。



彼らに言ひ給ふ『ゆけ』悪鬼いでて豚に入りたれば、視よ、その群みな崖より海に駆け下りて水に死にたり、飼ふ者ども逃げて町にゆき、凡ての事と悪鬼に憑かれたりし者の事を告げれば視よ、町人こぞりてイエスに逢はんとて出できたり、彼を見て、この地方より去り給はんことを請へり。

ガダラ人は全世界よりも、貴き人の靈魂の救はれし喜びよりも、價值なき豚の損害を悲んでイエスを其地より追ひ出した。

### 太九章一節―八節 中風の病者

中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに連れ來れり。

中風の病人を床のまゝ四人にてかつぎ來りしが、群衆のためにイエスに近づく事能はねば屋根に登り、イエスの在す處の上を破り床のままつり下した(可二章三節四節)

イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』彼らはイエスに近づけば必ず癒さるると信じ萬難を排して近づけば、イエス其の熱心と信

仰を見て子よ心安かれ、汝の罪赦されたりと言ひ給ふた、此人は罪を犯せしため病を受けし者にて、精神と肉体に苦痛があつた故に、イエスは先づ罪を赦して精神の苦痛を除き給ふた。

視よ、或る學者ら心の中に言ふ『この人は神を瀆すなり』

學者は罪を赦すは神の職權なるに、人が罪を赦すと言ふは、神を瀆す事であると言つた。イエスその思を知りて言ひ給ふ『何ゆえ心に悪しき事をおもふか、汝の罪ゆるされたりと言ふと起きて歩めと言ふと、孰か易き』

人の目に見へぬ罪を赦すも、人の目に見ゆる病を癒すも、イエスに於ては難易はない。人の子、地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲にここに中風の者に言ひ給ふ『起きよ、床をとりて汝の家にかへれ』彼おきてその家にかへる。

イエスは人の目に見へぬ罪を赦す權のある事を人の目に見ゆる病を癒す事によりて、證明せんとて中風の病者を癒し給ふた。

### 太九章九節―十三節 マタイの宴會



イエスマタイの収税所に坐しをるを見て『我に従へ』と言ひ給へば、立ちて従へり、家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの取税人、罪人ら來りてイエス及び弟子達と共に列る。

マタイとは神の賜との意、一名はレビと言ふ、彼は已の召されし光榮と朋友をイエスに招介せんとて宴會を開いた。

パリサイ人これを見て弟子たちに言ふ『何故なんぢらの師は取税人、罪人らと共に食するか』

パリサイとは離れ分るゝと言ふ事で、汚れより離れ、俗より分れてきよき者との意なれば、パリサイ人は罪ある人と共に食せば汚れを受くると信じて居た、然るにイエスが罪ある人と共に食し給ふを見て、あやしみ何故罪ある人と共に食するやと問ふた。

之を聞きて言ひたまふ『健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者これに要す』

醫者は健康者の家に入らずして、病者の家を訪ふ、これは健康なる者は醫者を要せず病める者はこれを要するによる。

汝ら往きて學べ『われ憐憫を好みて、犠性を好まず』とは如何なる意ぞ。

神はあはれみを好んで、犠性を好み給はぬとホセヤ六章六節の聖言を學ぶならば、イエス

の税吏や罪ある人と共に食し給ふ事が解る。

我は義しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり。

原憲は善を知りて行ふ事能はぬ者を病むと言つた、イエスの降世の目的は、われは義人なりと思ふ人を招くためではなく、われは善を知りて行ふ事能はぬ病人なりと思ふ者を救はんが爲である。

### 太九章十四節—十七節 斷 食

ヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ『われらとパリサイ人とは斷食するに、何故なんぢの弟子たちは斷食せぬか』

パリサイ人は斷食を巧徳の如く思ひ、ヨハネの弟子は義務の如く考へた、然るにイエスの弟子が斷食せぬを見て何故斷食せぬかと問ふた。

イエス言ひ給ふ『新郎の友達、新郎と偕にをる間は、悲しむことを得んや、されど新郎をとらるゝ日きたらん、その日斷食せん。』



斷食は罪を救き又哀しむ時になすべきものである、新郎の友が新郎と喜びを共にする時の如く今は弟子がイエスより恵みを受けて喜びを共にする時なれば斷食すべきでない然れど新郎を取らるゝ日來らん其時は哀しむ時なれば斷食せん。

### 太九章十六節—十七節 宗教の混同

新しき葡萄酒を舊き革袋に入る、事はせずもし然せば袋はりさけ酒ほとばしり出て、袋も又すたらん新しき葡萄酒は新しき革袋に入れ斯て兩なから保つなり。

のびつきた舊き革袋に新しき葡萄酒を入れなば、酒が膨張して袋を破り酒漏れ出づれば新しき酒は新しき革袋に入れ、舊き酒は舊き革袋に入れねばならぬ、斯くの如く宗教も新舊混同してならぬ。

### 太九章二十節—二十二節 血漏患者

視よ、十二年血漏を患ひ居たる女、イエスの後に來りて、御衣の總にさはるそれは御衣にだに

觸らば救はれんとの心の中にいへるなり。

此女は十二年間、醫者の爲に己が身代を盡く費したれど、誰にも癒されなかつたが（路八章四十三節）イエスの衣だにもさはらば救はれんとの信仰があつた、故に、人目を忍んでイエスの衣にさはりて癒された（路八章四十四節）これは誤つた信仰なれどイエスは彼の眞實を好みして、これを癒し給ふた、然し彼は病は癒されしが恵みを盗みし爲に良心に苦しみを覺ゆるに至つた。

イエスふりかへり、女を見て言ひ給ふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんちを救へり』

イエスは彼が良心に苦しむを知り給へば、それを除かんとて顧み給ふた、女かくされぬ事を知りたれば、御前に出て實情を告白した（路八章四十六節四十七節）イエス彼に言ひ給ふ『心安かれ、汝の信仰汝を救へり』と彼は遂に肉体も心靈も救はれた。

### 太九章十八節十九節及び二十三節—二十五節 ヤイロの娘

司來り、拜して言ふ『我娘、今死にたり、然れど來りて御手を之におき給へば活きん』



ヤイロはイエスが病人の處に來り給はずば救はれぬと思つた、是は肉信的信仰である。司の家より使者來りて司に言ふ『娘は早や死にたれば師を煩すな』(路八章四十九節)此使者はイエスは病人は癒し給ふも、死人は能はぬと思つた、是又肉信的信仰である、イエス司に言ひ給ふ『恐るな唯信せよ、然らば娘は救はれん』(路八章五十節)斯てイエス司の家に行き、笛ふく者と騒ぐ群衆を見て言ひ給ふ『退け、少女は死にたるにあらず、寐ねたるなり』人々イエスを嘲笑ふ、群衆の出されし後、入りて其手を取り給へば少女おきたり。

不信仰の者は働きを妨げば、これを追ひ出して後、司の娘を復生らしめ給ふた、司はイエスが恐るるな唯信せよ、娘は救れんとの聖言を信せしがこれを假の信仰と言ふ、其の聖言を信じつゝ、家に歸りしが、これを信仰の實行と言ふ、イエスが娘を復生せ給ひしを目撃してイエスの聖言の眞なるを知つたこれを完全の信仰と言ふ。

太九章二十八節—三十節 一人の盲人

イエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言ひ給ふ『我この事を爲し得ると信するか』彼ら言ふ『主よ然り』

信仰は恵を受くる方法なれば、イエスは彼らに信仰を起さしめんとて我は汝の目を開き得ると信するやと問ひ給ふた、彼等は主よ然りと信仰を言ひあらはした。

イエスカれらの目に觸りて言ひたまふ『爾の信仰の如く爾に成れ乃ち彼の目あきたり』信仰の如く成るとは心靈界の原則である。

太九章三十五節—三十八節 イエスの傳道

イエス偏く町村を巡り其會堂にて聖國の福音を宣傳へ諸の病諸のわづらひを癒し給ふ。

イエスはカペナウン市を傳道の中心としてカリヤ州を巡り福音を傳ひ病を癒し給ふた。群衆を見て牧者なき羊の如く憐れみたるを憫み弟子等に云ひ給ふ収獲は多く労働者は少し是故に収獲主に労働者を其収獲場に遣し給はん事を求めど。神より離れたる群衆が喜びも慰めも得ずして憫み苦しむを憫み救を求むる者は多く、導く



者は少し故に天父に導く者を世界に遣し給はん事を求めよと弟子に命じ給ふた。  
イエス此十二人を遣さんとして命じて云給ふ異邦の途に往くな又サマリヤ人の町に入るな、イスラエルの家の失せたる羊にゆけ。

イエスはイスラエル民族より肉体を受け給ひたれば、イスラエル民族に對する使命を果し給はねはならぬ故に、先づイスラエルの家の失せたる羊に往けと言ひ給ふた。

往きて宣べつたへ『天國は近づけり』と言へ、病める者をいやし、死にる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、悪鬼を逐ひいだせ、價なしに受けたれば價なしに與へよ。

彼等が待望みし天國が近づいたと告げ、其證據として奇蹟を爲せど。

帯の中に金、銀または錢をもつな、旅の囊も、二枚の下衣も、鞋も、杖ももつな、労働人の、その食物を得るは相應しきなり。

イエスは到る處にて傳道者を歓迎する事を知り給へば、旅行準備の必要なきことを示し給ふた。

人の家に入らば平安を祈れ、其家もし之に相應しくば、汝らの祈る平安は、其上に臨まん、も

し相應しからずは、其の平安は汝らに歸へらん。

家人の爲、平安を祈れ、家人が恵みを求むる心があらは、平安は其人に留る、然からざれば祈る人に歸る。

人もし汝らを受けず、汝らの言を聽かずば、其家、其町を立ち去る時、足の塵を拂へ。

エダヤ人が偶像國より歸りし時、國境に於て偶像の汚れに關係なき事を明にする爲に足の塵を拂ふ習慣があつた、イエスは之を利用して福音を受けざる者の刑罰に關係なき事を明かにする式と爲し給ふた。

我れ汝らを遣すは、羊を豺狼の中に入るゝが如し、此故に蛇の如く慧く、鴿の如く素直なれ、人々に心せよ。

## 太十章十九節—二十一節 迫害

彼ら汝らを付さば、如何に何を言はんと思ひ煩ふな、汝らの中に在す父の靈が言ひ給ふ、兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子供は親に逆ひて之を死なしめん、されど終りまで耐へ忍ぶ者



は救はるべし。

(四十六)

不信者は父子兄弟の人情を失ふて信者を迫害するも死に至るまで忠信なれ(黙二章十節) 蔽はれたる物に露れぬはなく、隠れたる物に知られぬは無ければなり、暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ、耳をあて、きくことを屋の上のべよ。

真理は蔽はれても露はれぬ事はない、隠れても知られぬ事はない故に恐るゝ事なく大膽に宣へよ。

身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂と地獄に滅し得る者を恐れよ。

身体を殺すも、靈魂を亡ぼす能はぬ人を恐るな、身体と靈魂とを亡ぼし得る神を恐れよ。

二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許なくば、其一羽も地に落つること無からん、汝らの頭の髪迄も皆數へらる、是故に恐るるな、汝らは多くの雀よりも優るゝなり。

價値なき雀ですら護り給ふ神は、多くの雀よりも優るわれらを守りて頭の髪一筋をも失せしめ給はぬ故に恐るゝな。

人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん、されど人

の前にて我を否む者を、我も又天にいます我が父の前にて否まん。

信仰を表白する者は、此世に在りて恥辱を受くるも天國にては神より忠義の報賞を受く。

### 太十章三十四節—三十六節 苟且の平安

われ地に平和を投せんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投せん爲に來れり。

イエスは外科醫の如く、真正の平和を與へん爲に先づ苟且の平和を破り給ふ。

それ我が來れるは人を其の父より、娘をその母より、嫁をその姑障より分たん爲なり、人の仇は、その家の者なるべし。

一家の中に一人キリストを受け入るゝ者ある時に始めに起る事は一家の動乱である(米迦七章六節)

### 太十章二十七節—三十九節 弟子の條件

我よりも父また母を愛する者は、我に相應しからず、我よりも息子また娘を愛する者は、我に

(四十七)



相應しからず、又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず、生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失ふ者はこれを得べし。

父母子女に優りてイエスを愛すること(創二十三章二節)已に與へられし十字架を任ふてイエスに従ふ事イエスの爲に已が生命を捨る事、これらを具備せぬ者はイエスの弟子となるを得ぬ。

### 太十章四十節四十二節 歡待の報

汝らを受くる者は、我を受くるなり、我をうくる者は、我を遣し給ひし者を受くるなり、預言者たる名の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆえに義人を受くる者は、義人の報を受くべし、凡そわが弟子たる名の故に、この小さき者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。

敬神の心を以て神の代言人なるが故に、神の代言人を歡迎する者は神の代言人が受く報を受く、義を愛する心を以て義人なるが故に義人を歡迎する者は、義人が受くる報を受く、イエ

スを愛する心を以てイエスの弟子なるが故にイエスの弟子を歡待する者は必ず其の報を失はぬ、預言者とは代言人と言ふ事である。

### 太十一章一節一六節 イエスの證明

ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、イエスに言はしむ『來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか』

ヨハネはわが後より來り給ふ者はメシヤにして世を審き給ふと思ひ、今や斧を樹の根に置かる(太三章十節)又箕を以て禾場をきよめ給ふと言つた(全十二節)然るに今牢舎の中に在りて聞けば、イエスは愛に充ちて、人をあはれみ給ふこと慈母の如しと、故に心に疑ひを生じ弟子らを遣して待望むメシヤは汝なるか他に待つべきかと問ふた。

答へて言ひ給ふ『ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる、おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』



イエスは彼らの質問に答ふるに、自分の言行を以てメシヤの證明とし(賽三十五章五節)且つわがために躓かぬ者は福であると注意し給ふた。

太十一章七節—十一節 ヨハネ観

彼らの歸りたるをり、ヨハネの事を群衆に言ひ出でたまふ、汝ら何を眺めんとて野に出でし風にそよぐ葦なるか、然らば何を見んとて出でし、柔かき衣を着たる人なるか、視よ、やはらかき衣を着たる者は王の家に在りさらば何のために出でし、預言者を見んとてか、然り、汝らに告ぐ、彼は預言者より勝る者なり。

先きにヨハネがヨルダンの川畔に立つて神命を傳へし時、汝らは何を見んとて荒野に出でたであろうか、我は時勢を卓觀せりと誇つて名譽のために世の風潮に動かさるゝ葦の如き人であつたか、否然らば何を見んとて野に出でたのか、我は手腕家なりと誇つて王におもねり、人にへつらひ美服を衣て世の榮華と權勢を貧る人であつたが、かゝる人は王の宮にあり、然らば何を見んとて荒野に出でたのか發然と信仰に立つて神命を傳へ、世を改造せんとする預言者なるが、然り彼は預言者よりも優れたる者なり。

視よ、我使を汝の顔の前につかはす、彼は汝の前に汝の道を備へんと録されたるは此人なり。

イエスを迎ふる準備に悔改めを命ずる使者をイエスの前に遣さんと録されたは此ヨハネである(馬三章一節)

誠に汝らに告ぐ、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき、然れども天國にて小き者も、彼より大なり。

ヨハネよりもキリストを識る知識の大なる者はなかつた。

バプテスマのヨハネの時より、今に至る迄天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者は此を奪ふヨハネの説教をききて多くの人々が、天國を奪はんとせしが、眞實悔改めて奮勵努力せし者は奪ふた。

太十一章十六節—十九節 今の世

我、今の代を何に比へん、童子、市場に坐し友を呼びて『我ら汝らの爲に笛ふきたれど汝ら踊



らず、なげきたれど汝ら胸うたざりき』と言ふに似たり。

(五十二)

今の世は童子が街路にて戯れに笛をふきて喜ばしき婚姻のまねをするも、其侶は和して踊らず、哀んで葬式のまねをするも、其侶は同情して胸うたざるが如くである。それはヨハネ來りて、飲食せざれば『惡鬼につかれたる者なり』と言ひ、人の子來りて飲食すれば『視よ、食を貪り、酒を好む人』と言ふ。

童子と其侶との間に意志の疎通なきが如くキリストと學者らとの間に理解も同情もなければ、ヨハネは惡鬼につかれた者、キリストは酒を好む者と言つた。されど智慧は己が業によりて義しとせらる。

彼らは何んど誤解しても智慧なるキリストは己が業即ち十字架によりて生み給ひし子に義しとせられ給ふ『哥上一章二十四節』見る人の心々に任せ置きたかねに澄める秋の夜の月。

### 太十一章二十節—二十四節 イエスの歎息

イエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ。

イエスは多くの奇跡を爲してメシヤたる證明を爲し給ひしも、彼らが悔改めて信仰を起さざれば、彼らの將來について責め給ふた。

禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業をツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん、されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンは汝らよりも耐へ易からん。

コラジンヤベツサイダはイエスの奇跡を見、又其教を聞くも悔改めざれば、奇跡を見ず、教をきかずして亡びしツロンとシドンよりも未來の刑罰が重い。

カペナウムよなんちは天にまで擧げらるべきか否黄泉に落さるべし。

カペナウムはイエスのカリラヤ傳道の中心地なれば奇跡と見説教をきく事が多かつた然るに彼等が悔改さるにより斯く云ひ給ふた。

### 太十一章二十五節—二十七節 イエスの感謝

其時イエス答へて言ひ給ふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者に

(五十三)



かくして嬰兒に顯し給へり、父よ、然り、斯の如きは聖意に適へるなり、

イエス心に喜びて天父に言ひ給ふ神のあはれみより出づる救の道、即ち信する者を救ふ神の智慧を高慢なる者にかくして、謙遜なる者に現し給ふを感謝すると。

凡ての物は我わが父より委ねられたり、子を知る者は父の外になく、父を知る者は子また子の欲するまゝに顯すところの者の外になし。

天父は天父の有ち給ふすべてのものを子に與へ給ふた、子は受け給ひし凡てのものを欲するまゝに現し給ふた（約十六章十五節）故に子は如何なる御方なるかを識る者は天父の他にない又天父は如何なる御方なるかを識る者は子、及び子が欲するまゝに凡てのものを現し給ふた業の他にない（約一章十八節同十四章九節）

### 太十一章二十八節—三十節 休息と平安

凡て勞する者、重荷を負ふ者、我に來れわれ汝らを休息せん、我は柔和にして心卑ければ我がくびきを負ひて我に學べ然らば靈魂に平安を得ん。

罪の記憶を去らんとして勞れたる者よ、イエスを信せよ、然らば罪赦されて休息を得ん、又罪の能力を去らんとして重荷となれる者よ、イエスに來りてイエスの柔和と謙遜を學べ然らば聖靈により罪きよめられて靈魂に平安を得ん。

わがくびきは易く、わが荷は輕ければなり。

舊約時代に負はせられたるくびきは十誠なれば、何人も負ふ者がなかつた、然れど新約の時代となりて、イエスの負せ給ふくびきは信する事なれば易い無學の者でも、弱き者でも何人でも出来る又イエスの挽せ給ふ荷は輕い愛せよとの誠である（約十三章三十四節）ヨハネは此誠は難からずと言つた（約一書五章三節）罪赦されて聖靈を受けし者は愛心が溢るるが故に易い。

### 太十二章一節—七節 安息日

イエス安息日に麥畠をどほり給ひしに弟子たち飢ゑて穂を摘み、食ひ始めたるを、パリサイ人見てイエスに言ふ『視よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事をなす』



汝の隣人の麥畑の穂を食ふも宜しとあれば(申二十三章二十五節)食ひしをどがめたのではない穂を摘みしは安息日に働きのしたのであると、どがめたのである。

彼らに言ひ給ふ『ダビデがその伴へる人々どもに飢えしとき、爲し、事を讀まぬか、即ち神の家に入りて、祭司のほかは、已もその伴へる人々も食ふまじき供のパンを食へり』

また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せしども、罪なきことを律法にて讀まぬか、われ汝らに告ぐ、宮より大なる者こゝに在り『われ憐憫を好みて、犠性を好まず』とは如何なる意かを汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。

イエスは昔、タビデがソロ王の怒を逃れし時、途にて飢えたればノアの神殿に入り祭司の他は食ふまじき供のパンを食せし事のありし事を告げ(母前二十一章六節)儀式は宗教の方法にして目的は隣憫みなれば場合により目的の爲に方法を廢する事あると教へ給ふた(ホゼヤ六章六節)

片手なえたる人あり人々イエスを訴へんと思ひ問ひて言ふ『安息日に人を醫すことは善きか』  
イエスは神は憐憫を好みて祭を好み給はぬと言ひ給へば、彼らはイエスを安息日を犯せし

罪人としてサンビジリムの議會に訴へんと思ひ、其の種を得んために此質問をした。

彼らに言ひ給ふ『汝らのうち一匹の羊をもてる者あらんに』若し安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか、人は羊より優る、こと如何許ぞ、さらば安息日に善をなすは可し』

イエスは人は羊に優る事を述べ、且つ安息日にわが如く人を救ふと、汝らの如く人を殺すと何れを爲すべきかと言ひ給へば、彼ら答ふる言なく默然とした(可三章四節)

かの人に言ひ給ふ『なんちの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。

### 太二十二章二十九節—三十二節 悪魔縛らる

人先強き者を縛らずば、いかで強き者の家に入りて、その家財を奪ふことを得ん、縛りて後その家を奪ふべし。

強き者は悪魔で、家は此の世界で、家財は人の靈魂である、イエスの現れ給へるは悪魔の業を毀つ爲なれば(約一書三章八節)神の靈により悪魔を追ひ出して、悪魔が家財とせし人の靈魂を奪ひ神に歸らしめて此の世界を神の國と爲し給ふ。



我と偕ならぬ者は我にそむき、我と、もに集めぬ者は散すなり。

神の戦争には中立がない、イエスと共に戦はぬ者は敵で、イエスと共に働かぬ者は妨害者である。

### 太十二章三十一節—三十二節 赦されぬ罪

人の凡ての罪と瀆とは赦されん、然れど言をもて聖靈に逆ふ者は、この世にても後の世にても赦されじ。

凡ての罪は悔改てイエスの恵みを信せば赦さる、然れどイエスが神の靈力により悪鬼を追出し給ひしことを能く知りつゝも、イエスの名聲を打ち消さんと思ひイエスは悪鬼の王を使ふて其子分を追ひ出したと言ふが如き罪はいつまでも赦されぬと。

### 太十二章四十三節—四十五節 悪鬼の再来

穢れし靈、人を出づるときは、水なき處を巡りて休を求む、而して得ず、乃ち『わが出でし家

に歸らん』と言ひ。

人の心に入りて人を苦しむ事を己が食物とする者を悪魔と言ふ、人が悔改めし時は其人より追ひ出たさるされと荒野をめぐるも休みを得ざればわが出し家に歸へらんと云ふ。

歸りてその家の、空きて掃き浄められ、飾られたるを見、遂に往きて己より悪しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む、されば其の人の後の状は前より悪しくなるなり。

悪鬼が歸りて見れば其の人の心は掃ききよめられて主人のなき空家の如くなれば、彼は喜んで己よりも悪しき悪鬼を連れ歸りて住む然らば此人の後の状は前より悪しくなる故に悔改めたならば聖靈を迎ひて主人とせねばならぬ。

### 太十三章二節—八節 種播のたごひ

種播く者、まかんとて出づ、播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりてつえばみ盡せり。

種を播く者はキリストで種は教で、鳥は悪魔で路の傍は頑固なる心である路の傍に落ちし種は地中に入らざれば鳥が來りてつえばみ盡す其如く、頑固なる心の人が教をきくも心に入



らざれば、悪魔來りて教を奪ひ去るを云ふ。

土うすき焼地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かにはえ出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。

土うすき焼地とは思慮の浅き心である、焼地に落し種は、土があさければ早く芽を出すも深く土に根ざされば太陽の炎熱に遇へば枯る、其如く、思慮の浅き心の人が教をきくも早飲み込みして教の意味が心の根底に徹せざれば、迫害や患難に遇へば消失するを云ふ。

茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。

茨は誣われし意にて、世の榮華を慕ふ心である茨根ののある畑に落し種は芽を出して成長するも、茨も芽を出して成長せば遂に茨に覆はれて實らぬ、其如く世の榮華を慕ふ心の人

が教をきくも教の意味は悟れても世の榮華を慕ふ心に妨げられて効果を結ばぬを云ふ。

良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結べり。

良き地とは柔和謙遜の心である、良き地は石もなく、茨もなく、土は柔にして且つ深ければこれに落し種は何の妨げもなく、成長しても百倍の實を結ぶ其如く柔和謙遜の心の人

### 太十三章十節—十七節 天國の奧義なるキリスト

弟子達御許に來りて言ふ『何故譬にて彼等に語り給ふか』答へて言ひ給ふ『汝らは天國の奧義を知ることを許されたれど、彼らは許されず彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聞かぬ、是故に彼らには譬にて語る、然れども汝らの目は見、耳はきく故に福なり、誠に汝らに告ぐ、多くの預言者義人は、汝らが見る所を見んとせしが見ず、汝らが聞く所を聞かんとせしが聞かざりき弟子らは謙りて熱心に求めば、昔人の見んとして見る能はず、きかんとして聞く能はざりし奧義なるキリスト（西一章二十七節）を天父は聖靈を與へて心の目を開き其の眞の像を



見せしめ、心の耳を開き其聲をきかしめ給へば福なる者である。

(六十二)

### 太十三章二十四節—二十節 神の種と悪魔の種

天國は良き種を畑にまく人の如し、人々の眠れる間に、仇きたりて麥の中に毒麥をまきて去りぬ、苗はる出でて實りたるごき、毒麥もあらはる。

良き種はキリストの教で、播く者はキリストで、畑は教會で、仇は悪魔で、毒麥は悪魔の子で、麥は神の子である、イエスは教會に教の種を播き給ひしが、悪魔も已の種を播きたれば悪魔の子も現れた。

僕ども來りて家主に云ふ『主よ畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何にして毒麥あるか』  
主人云ふ『仇のなしたるなり』僕ども云ふ『さらば我らが往きて之を抜き集むるを欲するか』  
主人云ふ『否恐らくは毒麥を抜き集めんとて麥をも共に抜かん、兩ながら收穫迄育つに任せよ  
收穫のとき我かる者に、まづ毒麥を抜きあつめて、焚くために之を束ね、麥はあつめて我が倉に納れよ』と言はん。

主人はキリストで、僕は牧師で、收穫は世の終りで、倉は天國で、焚くは地獄の火で焚く事である。牧師は悪魔の子を退會せしめんと言ひしが、キリストは悪魔の子を退會せしめんとて、誤つて神の子をも退會せしめる恐れあれば世の終りまで兩ながら育つに任せ置けと言ひ給ふた。

### 太十三章三十一節—三十三節 芥 種

天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは萬の種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大く、樹となりて空の鳥ざたり、其の枝に宿るほどなり。

天國なる神の教會は、最初は芥種の如く、極めて小さきものなれども、芥種に生命あるが如く神の教會には生命あれば、漸次成長發達して大なる教會となり、空の鳥が來りて宿る如く世人も教會の感化を受くるに至る。

### 太十三章四十四節 かくれたる寶

(六十三)



天國は畑に隠れたる寶の如し、人、見出さば之を隠しをきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りて其の畑を買ふなり。

(六十四)

キリスト教は畑にかくれたる寶の如くである。人畑にかくれたる寶を見出せし時、直ちに掘出せば其實は地主の有となる其如く、キリスト教も見出すや直ちにこれを學ばず人を教ゆる爲になるも、わがためにはならぬ故に、かくれたる寶をわが有にせんと思はば、先づ所有を賣りて其畑を買はねばならぬ、其如くキリスト教をわが宗教にせんと思はば、わが所有、即ち時も寶も身も魂も、神に捧げて學ばねばならぬ。

### 太十三章四十五節—四十六節 智き商人

天國は良き眞珠を求むる商人のごとし、價たかき眞珠一つを見出さば、往きて有てる物を盡く賣りて之を買ふなり。

畑にかくれた寶は不意に見出せしが、此商人はかねてより眞珠をさがして居たのである。然し眞珠を見出して、わが所有を賣りて買はねばわが有とならぬ其如く、キリスト教を

見出しても我一切の所有を神に捧げねばわが宗教とはならぬ。

### 太十三章四十七節 五十節 魚を漁る綱

天國は海におろして、各様のものを集むるあみの如し。充つれば岸に引上げ坐して良きものを器に入れ、悪しきものを棄つるなり、世の終にも斯くあるべし、御使ひ出でて、義人の中より悪人を分ちて之を火の爐に投げ入るべし、其處にて哀しみ齒がみすることあらん。

天國なる教會は、海に投げ打つて魚を取るあみの如くである、あみの中に善きものも、悪しきものもあるが岸に引き揚げし時にこれを撰別する其如く、教會にも善人も悪人もあるが、世の終に神は天使を以てこれを撰別し給ふ。

### 太十三章五十二節 天國の學者

天國のことを教へられたる凡ての學者は新しき物と舊き物とをその倉より出す家主のごとし。キリスト教を學びし者は、舊き教へより新らしき教を發見 舊き智慧より新らしき智慧を

(六十五)



悟りて新舊を使用する主人となる。

(六十六)

### 太十三章五十四節—五十七節　ナサレに於けるイエスの説教

イエス已が郷に到り、會堂にて教へ給へば、人々驚きて言ふ此人は此智慧と此等の能力を何處より得しぞ、是木匠の子にあらずや、遂に人々彼に蹟けり。

ナサレ人はイエスの寄跡を見、又説教を聞きて驚き此智慧と能力は何處より得しやと考へしが、物質觀念にとらはれて智慧と能力の出處を見失ひ、イエスの外貌に目をつけて彼は大工の子にあらずやと遂に不信仰に陥つたニコデモはイエスの奇蹟を見て其智慧と能力の出處を悟りイエスに來りて言ふ『神が人と共に在すにあらざれば汝が爲せる此奇蹟は誰も爲し能はぬ』と言つた。(約三章二節)

### 太十四章三節—十一節　ヨハネの死

其頃國守ヘロデ、イエスの噂をきゝて、待臣どもに言ふ『これバプテスマのヨハネなり、彼死

人の中より甦へりたり、然ればこそ此らの能力その内に働く』と。

此ヘロデはヘロデ大王の長男ヘロデアンテバスである、彼は先に已を諫めしヨハネを殺せしが、其靈が絶へず來つて已の罪をせめつゝある央なれば、イエスの異能をききこれは我が殺せしヨハネが甦つたのである故に異能が其中に働くと恐怖心にかられた。

ヘロデ先に已が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れたり、ヨハネ、ヘロデに『彼女を納るゝは宜しからず』と言ひしに因る

ヘロデは其兄弟ピリポの妻ヘロデヤに戀慕してアラビヤの國王アレタの娘なる已が妻を離縁してヘロデヤをピリポより奪ひ、已が妻とした、ヘロデヤはヘロデアンテバスの兄弟アリストウブラスの娘なれば、ヘロデは三つの罪を犯した、已の妻を離縁し、兄弟の妻を奪ひ已の姪を妻とした故に、ヨハネが諫めたのである。

斯てヘロデヨハネを殺さんと思へど、群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とするればなり、然るにヘロデの誕生日に當り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまひてヘロデを喜ばせれば、ヘロデこれに何にても求むるまゝに與へんと誓へり、娘その母に峻かされて云ふ『バプテスマのヨ

(六十七)



ハネの首を盆に載せてこゝに賜はれ』王憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與ふることを命じ、人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、その首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ少女はこれを母に捧ぐ。

ヘロデは先にヨハネを殺さんと思ひしも、群衆を恐れて殺さなかつたが、今は席上にある人に對してこれを殺した、人を恐れて惡を爲さざる者は又人を恐れて惡を致す者である。

### 太十四章十二節—十三節　ヨハネの死の報告

ヨハネの弟子たち來り屍體を取りて葬り往きてイエスに告ぐ、イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂しき處に往き給ふ。

イエスはヨハネの死をききて悲しみ、人を避けて寂しき處に退き天父に慰安を求め給ふた。ヨハネは神命を奉じて民衆を悔改めに導きし大預言者なりしが、少女のわづか三寸の毒舌により一生の最後を遂げた、われらは此事を考ふる時自然に思ひを天道に及ぼさざるを得ない。昔太史公が顔淵と盜妬とを對照して、天道は是なるか非なるかと言ひしが、イエス

は我らに天道の是なる事を明かに教へて言ひ給ふ『義人は父の國に於て日の如く輝く』と

(太十三章四十三節)

### 太十四章十四節—二十一節　パンと魚の奇蹟

イエス出て、大なる群衆を見これを憫みて其病める者を癒し給へり、夕になりたれば、弟子たち御許に來りて言ふ『こゝは寂しき處、はや時も晚し、群衆を去らしめ、村々に往きて、已が爲に食物を買せ給へ』イエス言ひ給ふ『彼ら往くに及ばず、汝ら之に食物を與へよ』

弟子らは人々を食を得ん爲に去らせ給へと言ひしがイエスは汝らこれに食を與へよと責任を命じ給ふた。

弟子達言ふ『我らが此處にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』

弟子らはどうすることも出來ぬと言つた。

イエス言ひ給ふ『それを我に持ち來れ』斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子達に與へ給へば弟子達之を群衆に與ふ



凡ての人、食ひて飽く。

(七十)

此パンと魚は童子の所持せしものであつた(約六章九節)我等も童子の如く靈の糧を常に蓄へ居て、イエスが此人に食を與へよと命じ給ふ時、イエスの祝福を受けて與へねばならぬ、又童子の所持せし物を基本とし又弟子らを煩して五千人を飽かせ給ひしは働きを共にして其榮光にあづからしめん爲であつた。

パンの余りと魚の残りを集めしに十二の筐に溢ちたり。

余りの屑を集めしめ給ひしは後進の者の食物にせん爲であつた。

## 太十四章二十二節—三十二節

### 航海に於ける試練

イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら郡衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かしむ斯て郡衆を去らしめてのち、祈らんとて窈に山に登り、夕になりて獨りそこに居たまふ、舟は早や陸より數丁はなれ、風逆ふによりて波になやまされ居たり。

イエスは逆風の起るを知り給ふも弟子らを強ひて舟に乗らせ先に渡らしめ給ひしは彼らの

信仰を試練なさしめん爲であつた。

夜明の四時頃、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給ひしに。

イエスは弟子たちを曉まで逆風の爲に苦しめ給ひしも、忍ぶ能はぬこらしめに遇せ給はずして(哥前十章十三節)夜明の四時頃來り救ひ給ふた、恰も鷺が其雛を背負ふて海上に出で其雛に鍛練をなさしむるが如く爲し給ふた。

弟子たち其の海の上を歩み給ふを見て心騒ぎ、變化の者なりと言ひて懼れ呼ぶ、イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ『心安かれ、我なり懼るな』ペテロ答へて言ふ『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到らしめ給へ』

海上を歩み給ふイエスを見て變化のものと思ひしはイエスの大能を信せぬ爲であつた、ペテロは主よわれに水を踏む力を與へて汝の處に到らしめよと云つた。

『來れ』と言ひ給へば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く、然るに風を見て懼れ、沈みかゝりければ呼びて言ふ『主よ、我を救ひ給へ』

ペテロは來れとの聖聲を信じ海の上を歩みしが、周圍の風の烈しきを見れば懼れを生し

(七十二)



て信仰を失ひ沈まんとした、我らも主に近づくには因難の海を歩まねばならぬ其時イエスの聖聲を信じて歩め、もし周囲の事情を顧みば信仰を失ふ。

イエス直ちに御手を伸べ、これを捉へて言ひ給ふ『あゝ信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか』相共に舟に乗りし時風やみぬ、舟に居る者どもイエスを拜して言ふ『誠に汝は神の子なり』

弟子らは救はれし實驗によりイエスは神の子なると信するに至つた。

### 太十五章一節—十四節 清潔に就ての教訓

パリサイ人、學者らイエスに言ふ『何故汝の弟子は、古人の言傳を犯すか、食事の時に手を洗はぬなり』

紀元前二百年頃、舊約の清潔の例に種々の細則を設けて言傳へた、彼らは此れを神の誠よりも大切に守つて居た、食する時、手を洗ふは其の一である。

答へて言ひ給ふ『何故汝らは又汝らの言傳によりて神の誠命を犯すか、即ち神は父母を敬へ』と言ひ『父又母を罵る者は必ず殺さるべし』と言ひ給へり、然るに汝らは『誰にても父又母に

對ひて我が負ふ所のものは、供物となりたりと言はゞ、父又母を敬ふに及ばず』と言ふ斯く其の言傳によりて神の言を空しうす。

神の誠は父母を敬ひ(申五章十六節)とある然るに彼らは言傳により父母を養ふべき物、

即ちわが所有は神に捧ぐる供物となつたと言はゞ父母を敬ふに及ばずと言ふ、故にイエスは言傳を以て神の誠を空しうすると責め給ふた。

斯くて群衆を呼び寄せて言ひ給ふ『聞きて悟れ口に入るものは人を汚さず、されど口より出づるものこれ人を汚すなり。』

口に入るものは腹を通りて厠に落つ故に人を汚さぬ、口より出づるものは心より出つ即ち悪念殺人淫行窃盜偽證誹謗是れ人を汚すものである。

爰に弟子たち御許に來りて云ふ『聖言をきゝてパリサイ人の躓きたるを知り給ふか』答へて言ひ給ふ『我が天の父の植え給はぬものはみな抜かれん、彼らを捨ておけ、盲人を手引する盲人なり二人とも穴に落ちん』。

言傳を教へて人を惑す者は神の花園にはわ出づる惡草の如きものなれば、神は必ず之を抜



き給はん、彼らを捨て置き二人共に井戸の如き穴に落ちんと。

(七十四)

### 太十五章二十二節—二十八節 カナンの婦

視よ、カナンの婦、其はとりより出てきたり叫びて『主よ、ダビデの子よ、我を憐み給へ、わが娘悪鬼につかれて甚く苦しむ』と言ふ。されどイエス一言も答へ給はず。

スリヤのピニケに生れた異邦なるカナン人種の婦呼ばりてあわれみを請ふもイエス一言も答へ給はぬ、是は彼の信仰を試むる爲であつた。

弟子達來り請ひて言ふ『婦を歸したまへ我らの後より叫ぶなり』答へて言ひ給ふ『我はイスラエルの家の失せたる羊のほかには遣されず』。

婦はイエスが答へ給はざるによります／＼信仰を厚くして呼つたれば、弟子らはこれを妨害と思ひ去らせ給へど願つた、イエス彼に云ひ給ふ、われはイスラエルの迷へる羊の外に遣はされずと拒絶し給ふた、是又彼の信仰を試むるためであつた。

婦きたり拜して言ふ『主よ、我を助け給へ』答へて云ひ給ふ『子供のパンを取りて、小犬に投

げ與ふるは善からず。

婦拒絶せられなばます／＼熱心になりイエスの前に出で拜して云ふ、主よ、我を助け給へど、イエス答て云ひ給ふ子供のパンを犬に與ふるは善くないと又彼の信仰を試み給ふた。

婦云ふ『然り主よ小犬も主人の食卓より落るたへ屑を食ふなり』爰にイエス答へて云ひ給ふ『婦よ汝の信仰は大なるかな願のごとく汝になれ』娘この時癒えたり。

婦は狗と呼ばれなば謙遜になりて云ふ『犬の如き者が貴きパンを戴く事は善くないは最もであります、然しいぬも主人の食卓より落る食へ屑は頂戴するではありませんか』と云ひたれば、イエス此をき、汝の信仰は大なり、汝の信仰の如く汝に成ると云ひ給へば、娘この時より癒ゆ、婦は答へられねば信仰を厚くし拒絶せられなば熱心になり、犬と呼ばれたれば謙遜になり遂にイエスの心を動かした、こゝに成巧の秘秩をみる。

### 太十六章十三節—二十節 カイザリヤに於ける信仰の試験

イエス、ピリポ、カイザリヤの地方にいたり。

(七十五)



此地はバレスチナ北方ヘルモン山の麓で、ヨルダン川の水源のある處である、イエスは靜に弟子たち教へんとて此の最も靜閑なる風景の良き處を尋ねて來り給ふた。

弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は人の子を誰と言ふか』彼ら言ふ『或人はバプテスマのヨハネ或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』彼らに言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』シモン、ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト活ける神の子なり』。

イエスは汝らは我をだれと思ふやと弟子らの信仰を試み給ふた、ペテロ答へて言ふ『誰が何んと言つても汝は我らの待望みしキリスト、活ける神の子である』と。

イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ、シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず天にいます我が父なり』。

イエスはペテロの答をき、喜んで言ひ給ふ『そうだそうだ、そこが大切だ、我はそれである、此信仰なくば天國に入られない、ヨナの子、汝は幸福なる者である、此の信仰は人より教へられしにあらで天父の啓示の賜である。(約六章四十五節)

我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝

たざるべし。

ペテロは堅實なる信仰を告白せば、イエス其信仰を褒め汝はペテロ、即ち磐である此磐の如き堅實なる信仰の上にわが教會を建てん、然して黄泉の門、即ち死の力はこれに勝たざるべし。

われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり。

イエスは、キリスト活ける神の子なりと信する者には天國の鍵即ち聖靈を與へ給ふ、鍵とは復數で天國の扉を開く鍵と鎖す鍵とで即ち地にて縛く事は天に於ても縛ぎ、地にて解く事は天に於ても解く事で神は聖靈を受けし者と同一の行動を爲し給ふ(哥後二章十五六節)

### 太十六章二十一節—二十三節 イエスの死と復活の預言

イエス弟子達に已のエルサレムに往きて、長老、祭司長、學者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日目に甦へるべき事を示し始め給ふ。



イエスの死は神の聖意である。(賽五十三章六節、詩四十章六七節)

ペテロイエスを傍にひき戒め出でて言ふ『主よ然あらざれ、此の事なんちに起らざるべし』イエス振返りてペテロに言ひ給ふ『サタンよ我が後に退け、汝はわが躓者なり、汝は神のことを思はず反つて人のことを思ふ』。

イエスの死は神の聖意なるに、ペテロはそれを思はず肉情を以てイエスを援き止めた、これはサタンがペテロを道具にしてイエスに躓を興へんとしたのである、故にイエスはサタンよ、我が後に退け、汝は神の事を思はず人の事を思ふと言ひ給ふたのである。(賽五十五章八節九節)

### 太十六章二十四節—二十六節 弟子たる者の三條件

爰にイエス弟子たちに言ひ給ふ『人もし我に従ひ來らんと思はば、已をすて已が十字架を負ひて我に従へ、已が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲に已が生命を失ふ者は之を得べし』。

弟子たらんと欲ふ者は已を退けて主に従ひ、與へられし十字架を忍んで主のために已が生命をも失ふ覺悟を要す。

人、全世界を得るとも已が生命を損せば何の益あらん、又その生命の代に何を興へんや。

全世界を我所有とするも肉体の生命即ち自己の存在を失はば何の益にもならぬ、然らば肉体の生命の代りに何物も易ゆるものは無い、其如く人は靈魂の生命即ち本我の存在を失へば生存の價値を失ふ然らば靈魂の生命の代りに何物も易ゆるものはない、故に哲人言ふ人にして禮なくば死せずして何をか待たん。

### 太十七章一節—十二節 イエスの變貌

六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登り給ふ、斯くて彼らの前にて其の狀かはり、其顔は日のごとく輝きその衣は光のごとく白くなりぬ。

ペテロが信仰を告白せしより六日の後、イエス九人の弟子を山下に残し、三人の弟子を伴



ひカイザリヤ、ピリビの正北、高さ九千尺のヘルモン山に登りて祈り給ふた、其祈りの概要はエルサレムにて遂げんと爲し給ふ死に就てであつた。(路九章三十一節)  
イエス祈り給ふ程に内部の神性が外部に現れ、顔の貌次第に變りて日の如く榮光を發ち、其衣も白く光を發つた。是はイエスが死んで天父の聖意を成就せんとの祈りを天父が納嘉し給ふた應驗であつた。

モーセとエリヤとイエスに語りつゝ、彼らに現る。

又天父はイエスの祈りに答て律法は罪人を罰する事を示すモーセと、神は罪人を救ひ給ふ事を預言するエリヤを降してイエスが遂げんとし給ふ死に就て慰め給ふた。

ペテロ差出でてイエスに言ふ『主よ我らの此處に居るは善し、聖旨ならば我ここに三つのいほりを造り一つを汝の爲、一つをモーセの爲、一つをエリヤの爲にせん』彼なほ語りをるとき、視よ、光れる雲、彼らを覆ふ。又雲より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり汝ら之に聽け』弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼るゝこと甚し、イエスその許にきたり之に觸りて『起きよ懼るな』と言ひ給へば、彼ら目を舉げしに、イエス一人の他は誰も見なざりき。

舊約の時代は去りて今は新約の時代となりたれば、モーセより律法をきゝ、又エリヤより預言をきく必要はない故に神は雲を降して集會を覆ひ、聲を以てわが愛しむ子に聞けと言ひ給ふた弟子らは恐れて倒れしが、イエスに起されて目を開けば、イエスの外見はなかつた。(哥前十三章十節)

### 太十七章十四節—二十一節 イエスの歎聲

かれら群衆の許に到りしとき、或人、御許にきたり跪ぎて言ふ『主よ、わが子を憫みたまへてんかんにて難み、しばし火の中に、しばし水の中に、倒るるなり。之を御弟子達に連れ來りしに醫すこと能はざりき』イエス答へて言ひ給ふ『あゝ、信なき曲れる代なるかな我れいつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを忍ばん』。

山下に在りし弟子らは子供の病を癒す事が出来なかつた爲に群衆に潮弄せられ、學者に論難せられて赤面の体であつた、イエスは山上より下りて此下界の状態を目撃して、乍ら歎聲を發し、あゝ、曲れる世なるかなと世を詛ひ、我れ何時までも汝らを忍ばんやと、イエス



は虚偽形式の世に住んで、眞實なき皮層の人と交り給ふの不快に忍ばれなかつた。

其子を我に連れきたれ、遂にイエス之を禁め給へば、悪鬼いでてその子この時より癒えたり。

父は其の子が難病なれば弟子に癒されなかつたから、イエスも癒し給ふ事は覺束なしと思ひ、汝もし爲す事を得ばわが子を憫み給へと叫んだ。イエスはわが爲す事を得ると否とに心配するな、汝の信仰の足るか否かに心配せよ、汝もし信する事を得ば信する者に於て、わが能力は能はぬ事はないと成功の秘訣を授け給ふた、其子の父直ちに聲を揚げ涙を流して言ふ主よ信す、わが信なきを助け給へと (可九章十四節—二十四節)

### 太十七章二十四節—二十七節 神殿の税金

彼等カペナウンに到りし時、納税をあつむる者ども、ペテロに來りて云ふ、汝の師は納金を納めぬか。

ユダヤ人は毎年、半シゲルを神殿の費用に納税することであつた。

ペテロ納むと言ひ、やがて家に入りしに逸速くイエス言ひ給ふ『シモンいかに思ふか、世の王

たちは税、又貢を誰より取るか、巳の子よりか、他の者よりか』ペテロ云ふ『他の者より』イエス云ひ給ふ『然れば子は自由なり』。

イエスはペテロに、子は親に納税するものにあらざれば、神の子たる自分は神に納税するは自由である事と認めさせ給ふた。

然れど彼らを躓せざる爲に、海に往きて釣をたれ、初めに上る魚を取れ、其口を開かば銀貨一つを得んそれを取りて我と汝の爲に納めよ。

イエスは斯く納税に自由なるも、人がイエスの納税し給はらぬを見て、これに倣ふ者の起らん事を恐れ又イエスは敬神の心なき者と誤解せん事を恐れ、彼等を躓せぬ爲に納税を命じ、又イエスが神の子なるに納税し給へば、イエスは神の子と信せしペテロの信仰の動かんこと恐れこれをも躓せぬ爲、税金を得るに奇跡を爲してペテロの信仰を強め給ふた。

### 太十八章一節—五節 天國にて大なる者

其時弟子等イエスに來りて云ふ『然らば大國にて大なる者は誰か』



弟子等は途中で天國にて誰が大なるか、と云ひ出せしか遂に争論に終りたれば、カペナウ  
ンに歸りし時イエスに質問した。

イエス幼兒を呼び、彼等の中に置きて云ひ給ふ『實に汝等に告ぐもし汝等ひるかへりて幼兒の  
如くならずは天國に入るを得ず』。

イエスは幼兒を彼等の中に立たせて云ひ給ふ、人は名譽心、高慢心、肉慾心、を去りて親  
を敬ひ、親を慕ひ、親に頼る此幼兒の心に改めねば天國の樂しき生涯に入るを得ぬと。  
然れば誰にても此幼兒の如く、己を卑ふする者は、これ天國にて大なる者なり。

嬰兒は心が空虚にして、無邪氣なれば己を卑ふして能く親の命に従ふ者である、此心を有  
つ者は天國にて地位の高き者である、イエスもこの心であつた、(約五節十九節)  
又わか名の爲に斯くの如き一人の嬰兒を受くる者は、我を受くるなり、  
イエスを敬慕する故に嬰兒の如き者を歓迎する者は、イエスを歓迎する者である、

### 太十八章六節―七節 躓かする者の禍なる事

我を信する此小さき者の一人を躓かする者は、寧大なるひき臼を首にかけられ海の深き處に沈  
られん、方益なり。

小さき者とは無學無智なる者、位置の卑き者、又弱き者を云ふ、人を躓かす者とは、人を輕  
蔑したり、不親切にしたりして惡感情を起させ、又人を惑はしたり、惡感化を與へたりし  
て罪に誘ふ者を云ふ。

此世は躓かするにより禍なるかな、躓く事は必ず來らん然れど躓きを來らす者は禍なるかな  
此世は惡歴か働き、罪惡か流行して人を躓かす、即ち罪に誘へは禍なる世である、故に躓  
く事即ち罪に誘はるゝ事は必ず來る、然れど躓きを來らす者、即ち人を惑はし、人を罪  
に誘ふ者は禍である。

### 太十八章十節―十二節 小さき者をあなごるべからざる事

爾等慎んで此小さき一人をもあなごるな、我爾らに告ぐ『彼らの天使等は天に在りて天に在す父  
の顔を常に見るなり。』



天父は小さき者を深く憫み大に愛して、高き位置を占める天使を以て護らせ給ふ、天父は斯く彼を愛して優遇し給へば、われらは彼をあなどりてはならぬ。爾等いかに思ふや、百正の羊を有てる人あらんに、もし其一正迷はば九十九正を山に遣し置き往きて迷へる者を尋ぬ。

イエスの降世は失せたる者を救はん爲であつた。

### 太十八章十五節 兄弟を諫むる事

もし爾の兄弟罪を犯さば往きて唯かれのみ相對して諫めよもしきかば其兄弟を得たるなり。

もし罪を犯す兄弟あらば、先其罪を公然にせず、獨往きて靜かに愛心を以て諫め。(加六章一節)

### 太十八章十九節—二十節 祈の力

われ誠に汝等に告ぐ、もし汝等の中、二人何事にも求むる事につき心を一つにせば、天に在

すわが父はこれを成し給ふへし、そはわが名の爲に二三人のあつまれる處には、我も其中に在ればなり。

いかに少數にても、心を一にして神の恵みを求めば必ず天父はきき給ふそはイエスを愛慕して、その榮の爲の集會には、イエスも共に在せば其祈りに力あるによる、然し時によりては祈りの條件の如く答へられずして、より勝れたる恵みを與へらるる事ある。

### 太十九章三節—六節 夫婦一体論

パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ『何の故にか、ほらす、人その妻を出すは可きか』答へて言ひ給ふ『人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り給へり、故に人は父母を離れその妻に合ひて二人の者一体となるべし』と言ひ給ひしを未だ讀まぬか、然れば、はや二人にはあらず一体なり、この故に神のは合はせ給ひし者は人これを離すべからず。

人、妻を娶れる後、恥づべき處ありこれを好まざれば、離縁状をつけて出せとモーゼが命じた。(申二十四章一節) 其解釋にシャンマイは恥づべき處とは姦淫の如き不品行なりと



言ひヒレルルは好ましからぬ行爲なりと言ふ、此問題を以てイエスに質問した、然るにイエスは先づ夫婦の根元に遡り二人一体の聖旨を述べ給ふた(創二章二十四節)。一体とは即ち合体の事である、資本を持寄り合ふて合体せし者を會社と言ひ、同一の精神の人が寄り合ふて合体せしを團體と言ふ、然し夫婦の合体は資本の持寄のみでなく、精神の一致のみでなく肉体的生命の合体である故に好ましからぬを理由として離縁すべきでない、然し姦淫の如きは肉体的生命の合体を破壊するにより離縁の理由となる。

### 太十九章十六節—二十二節 富める青年の歎き

或人みもとに來りて言ふ『師よ、われ永遠の生命をうる爲には如何なる善き事を爲すべきか』イエス言ひたまふ『善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者は唯ひとりのみ』。

彼は富豪家の青年で會堂の司で品行方正の人であつた、然るになほ不安が去らなかつたから何にか缺けた事あらんと思ひイエスに來りて言ふ、永生を得んには何の善き事を爲すべきかと彼は已が罪人なるを悟らざれば善き事を爲し得ると思ひ、又永生は善き事を爲して

得べきものと思ひ斯く言つた、イエス答へて言ひ給ふ善き事に就いて何ぞ我に問ふや、善き事を爲し得る善き者は神一人のみと。

汝もし生命に入らんと思はば誠命を守れ、彼言ふ『孰れを』イエス言ひ給ふ『殺すなかれ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、偽證を立つる勿れ、父母を敬へ、また已のごとく汝の隣を愛すべし』その若者いふ『我みな之を守れりなほ何を缺くか』イエス言ひ給ふ『汝もし全からんと思はば往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん、かつ來りて我に従へ』この言をき、て若者悲しみつつ去りぬ、大なる資産を有てる故なり。

イエスは十誠の下六誠を示し給ひたれば、彼は皆我が守れるものなるか、なほ平安も満足も喜樂もないか何にか缺けたところはありまいかと問ふた、彼か守れる道德は人に對する行爲上の普通道德なれば、凡てのものを捧げて神を愛する高尚道德か缺けて居た、故にイエスは彼を試験せんとして、汝もし全からん事を欲せば汝の所有を賣りて貧者に施せと云ひ給ふた、然るに彼は財産に心を奪われ此試験に落第して、悲哀と憂苦の地獄に陥つた。



イエス弟子等に云ひ給ふ『誠に汝等に告ぐ、富める者の天國に入るは難し、復汝らに告ぐ富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』弟子達之をき、甚だしく驚きて言ふ『さらば誰か救はるゝことを得ん』イエス彼らに目を注めて言ひ給ふ『これは人能はねど神は凡ての事をなし得るなり』。

弟子は富者は恵まれし者なれば卒先して神の國に入れらるると思ひしに、イエスが富者は神の國に入る事難しと云ひ給ひしをき、然らば誰か神の國に入るべきやと問ふた、イエス云ひ給ふ『人の力にては能はねど神の力にては能はぬ事なければ、謙りて神にたよれ』と富者とは財産のみでなく、智慧、能力、學識、才能をたのむ者をも云ふ、

### 太二十章一節—十六節 葡萄園主の憫み

天國は労働人を葡萄園に雇ふ爲に朝早く出てたる主人の如し、一日一デナリの約束を爲して労働人どもを葡萄園に遣す、又九時頃にも十二時頃にも三時頃にも復いでて前のごとくす、五時頃又出でしになほ立つ者らのあるを見て言ふ『何故終日ここに空しく立つか』彼ら言ふ『誰れ

も我らを雇はぬ故なり』主人云ふ『汝らも葡萄園に往け』夕になりて葡萄園の主人その家司に云ふ『労働人を呼び後の者より始め先の者にまで賃銀をはらへ』斯て五時頃に雇はれしもの來りて、おの／＼一デナリを受く、先の者來りて多く受くるならんと思ひしに、之も亦おの／＼一デナリを受く、受けしとき家主にむかひつぶやきて云ふ『この後の者どもは僅に一時間働きたるに、汝は一日の勞と暑さを忍びたる我らと均しく之を遇へり』主人答へて其一人に云ふ『友よ我れ汝に不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらずや、已が物を取りて往けこの後の者に汝と等しく與ふるは我が意なり、わが物を我が意のままに爲るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか』斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし。

孟子は巧に食ましむるか、志に食ましむるかと言つた、社會の法則は巧に酬ゆ、天國の法則は志を賞す、世は法理に基く、天國は憫みに基く、故に五時頃に雇はれし者は身体弱くして雇ふ者なきあわれな者なれば、憫み深き神は、あはれんで一デナリを恵み給ふたのである、先なる者とは兄で、後なる者とは弟である(路十五章二十五節)カインは已の巧に誇り、アベルは神のあわれみに頼り(創四章四節)パリサイ人は已の義に誇り、税吏は神のあわれ



みを乞ふた(路十八章十一節—十四節) 已の巧や已の義に誇る者は後になり、神の憫みに頼る者は先になる。

### 太二十章十七節—十九節 イエスの死と甦りの預言

イエス、エルサレムに上らんと爲し給ふとき、ひそかに十二弟子を近づけて、途すがら言ひ給ふ『視よ我らエルサレムに上る、人の子は祭司長、學者らに付されん、彼ら之を死に定め、また嘲弄し、鞭ち、十字架につけん爲に異邦人に付さん、斯て彼は三日めに甦へるべし。』

イエスの此旅行の目的は死である、イエスの眼中には自身が擧げられ給ふ十字架がありありと見へ、又祭司の長や學者らの殺さんとする計略が、はつきりと心に映するも、神は悪人の企を利用して萬民の贖罪を成就し給ふ聖意を知り給へば、我れもし地より擧げられなば萬民を引きて我に來らせんとの信念を懷き(約十一章三十一節) 十字架を榮光の位と思ひつつ勇んで死の旅路を進み給ふた、

### 太二十章二十節—二十二節 求むる處を知らぬヤコブとヨハネの母

ゼベダイの子らの母、その子らと共に御許に來り拜して何事か求めんとしたるに、イエス彼に言ひ給ふ『何を望むか』彼言ふ『この我が二人の子が汝の御國にて一人は汝の右に、一人は左に坐せんことを命じ給へ』イエス答へて言ひ給ふ『汝らは求むる所を知らず』。

彼らが何にか求めんどの素振を爲せば、イエス言ひ給ふ、何を望むか、彼ら言ふ左右大臣たらんことを、イエス言ひ給ふ汝らは求むる所を知らぬと。

我が飲まんごする酒杯を飲み得るか、彼ら言ふ『得るなり』。

酒杯とは神に従ふために受くる苦難即ち十字架の事である。

イエス言ひ給ふ『實に汝らは我が酒杯を飲むべし、然れど我左右に坐することは、これ我が與ふべきものならず、我が父より備へられたる人こそ與へらるるなれ』、

イエスの左右に坐する事は天の榮光を受くることなれば、イエスの親戚朋友の肉的關係によりて與へらるべきでない、父に備へられたる人、即ちイエスの受け給ふ杯を飲む者に天



父は與へ給ふ。

(九十四)

## 太二十一章六節—十一節 イエスの入城

弟子たち往きてイエスの命じ給へる如くして驢馬と其子とを牽ききたり、已が衣を其上におきたれば、イエス之に乗り給ふ。

イエスは土曜日ベタニヤに宿り、日曜日ベツパゲを通りオリブ山を越えケデロン河を渡りエルサレムに上り給ふた、此度の入城は形体上の國を建つる爲でなく、天下の人心を治むる國で(約十八章二十六節)其の王位は十字架である(約十二章三十二節)故に軍馬でなくろばに乗り平和の王たることを現し給ふた。

群衆の多くはその衣を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に敷く、かつ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりて言ふ『ダビデの子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者、いと高き處にてホサナ』遂にエルサレムに入り給へば群衆擧りて騒ぎ立ちて言ふ『これは誰なるぞ』群衆いふ『これガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり』。

群衆はイエスの入城せらるゝや、直ちに獨立國を建て給ふと思ひ、前後よりイエスを雍して大なる歡喜の聲を揚げ極めて、盛大なる入城式を行ふたのである、然るにイエスはこれに反して國民の誤解を哀み、來らんとする都城滅亡の末期を思ひ落涙痛哭し給ふた(路十章四十一節)、ホサナとは救ひを請ふ意のみならず、我國の萬歳の如く祝福の意あり。

## 太二十一章十二節—十三節 イエスの殿きよめ

イエス殿に入り其内なる凡ての賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺、鳩を賣る者の腰掛を倒して言ひ給ふ『わが家は祈の家と稱へらるべし』と録されたるに、汝らは之を強盜の巢となす此殿は紀元前千年の頃ソロモン王これを建て、同五百八十六年にネブカテネサル王これを破壊し、それより數十年の後クロシ王の許しを得てユダヤ人再建し、イエスのときヘロデ王美麗なる修繕を加へたものである、此殿の内庭はユダヤ人の祈る處で、外庭は異邦人の祈る處である、然るに奸商が多額の税金を祭司に納め外庭に於て神に献る牛羊鳩を賣り、又賽錢の金を兩換して多額の暴利を貪り居りたれば、イエスはこれを見て大にいきどり、

(九十五)



わが家は祈りの家と稱へられたるに、汝らはこれを強盜の巢と爲すと、繩を以て鞭を造り彼らを追ひ出して殿をきよめ給ふた、これはイエスが我らの心をきよめて聖靈の宮と爲し給ふ豫表である(哥上六章十九節)。

### 太二十一章二十節—二十二節 枯れた無花果

弟子等これを見怪しみて云ふ『無花果の樹の斯く立到に枯れたるは何ぞや』イエス答へて云ひ給ふ『誠に汝等に告ぐもし汝等信仰ありて疑はずば唯に此の無花果の樹にありし如き事を爲し得るのみならず、此の山に移りて海に入れと云ふも亦成るべし、且祈りの時何ににても信じて求めば盡く得べし。』

求むるに疑をいだかさる信仰、求めて、得らる信仰は、神の聖意に適ふ事を求むる事である、ヨハネはわが確信する處を述べて云ふ、聖意に適ふ事を、求めは神は必ずき、給ふ、斯く求むる處を神かきき給ふ事を知らは、求めし願を得たと信する事を得ると、約一ノ五章十四節十五節、求むるには熱心の行爲と忍耐の精神かともなはねばならぬ、太七章七節、

作物に譬へば熱心の行爲とは、土を深く掘り、肥料を施し、草を取り水をそゞぎ、虫を取るなど人事を盡す事である、又忍耐の精神とは天祐の現るゝを忍んで待つ事である。

### 太二十一章二十三節—二十七節 イエスの戦術

殿に到りて教へ給ふとき、祭司長、民の長老ら御許に來りて言ふ『何の權威をもて此等の事をなすか、誰がこの權威を授けしか』イエス答へて言ひ給ふ『我も一言なんぢらに問はん、若し夫を告げなば、我もまた何の權威をもて此等のことを爲すかを告げん、ヨハネのバプテスマは何處よりぞ天よりか、人よりか』

彼ら言ふ誰か殿をきよめ説教を爲す權威を汝に與へしやと、イエス言ひ給ふヨハネの洗禮は神より受けし權威なるやヨハネ自己の考へなるや我に告げよ、然らば我も汝らに告げん。かれら互に論じて言ふ『もし天よりと言はゞ何故彼を信せぬかと言はん、もし人よりと言はば民を恐る』民皆ヨハネを預言者とすればなり。

ヨハネはイエスに就いて證言せり(約一章十九節以下)故にもしヨハネが洗禮を旋すは神



の權威なりと言はば、何故ヨハネの證言を信せぬかと言はん、もし彼自己の考なりと言はば民皆ヨハネを預言者と信せば民に撃たれん事を恐れた。遂に答へて『知らず』と言へり、イエスもまた言ひ給ふ『我も何の權威をもて此等のことをなすか汝らに告げし。』

彼らにイエスを審判する力があるならば、ヨハネを審判する力がある筈だ、ヨハネを審判する力がないならばイエスを審判する力があり得ない。

### 太二十一章三十二節—四十一節 責任を知らぬ農夫

ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を堀り橋を建て農夫どもに貸して遠く旅立せり。

主人は神で、葡萄園は宗教で農夫は、ユダヤ人で、果は仁愛の心である、神は宗教をユダヤ人に貸し與へて、仁愛の果を結ぶを一日千秋の思ひを以て待ち給ふた。

果期ちかづきたれば、その果を受け取らんとて僕らを農夫どもの許に遣し、に、農夫どもその

僕らを執へて一人を打ちたゞき、一人を殺し、一人を石に撃てり、復ほかの僕等を前よりも多く遣し、に、こられも同じやうにあしらへり。

神は果を得んとて預言者をしばし遣し給ひしが、彼らはたびごとくに慘酷にあしらひた。

わが子は敬ふならんと言ひて、遂にその子を遣し、に、農夫ども此の子を見て互に言ふ『これは世嗣なり、いざ殺してその嗣業を取らん』斯て之をさらへ葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。

神はわが子は敬ふならんと云つて、その世嗣を遣し給ひたれば、彼等は世つぎを殺さば葡萄園はわれらのものになると思ひ遂に世つぎをもエルサレムの外に出して殺した、世つぎとはイエスの事である。

さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を爲さんか。彼ら云ふ『その悪人どもを飽くまで滅し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべし』イエス云ひ給ふ是故に汝等に告ぐ、汝等は神の國を取られ其果を結ぶ國人はこれを與ひらるへし。

是はユダヤ民族に就てイエスの預言である、果せるかな紀元七十年に葡萄園の主人なる神は、羅馬の軍勢を以て、悪しき農夫なるユダヤ民族を滅し、葡萄園なる宗教を異邦人に與



へ給ふた、即ちユダヤ人の恵みの時は鎖されて、異邦人の救の日が開かれた。

聖書に造家者の捨たる石は是ぞ隅の首石となる、是主の爲し給へる事にて我等の目に怪きなり  
詩百十八章二十二節の預言である、石とはイエスの事である、ユダヤ人の司がヒラトに付  
して、捨てし石なるイエスは甦りて世界的宗教の基礎となり給ふた、是は人より見ればあ  
やしきも全能の神の聖業である。

此石の上に倒るる者は碎かれ、又此の石、人の上に倒れば微塵にならん。

イエスに躓く者は損害を受く、イエスに敵對する者は亡ぼさる。

### 太二十一章一節—十四節 王子の婚宴

天國は王其子のために婚宴を設くる如し、婚宴に招き置きたる者を迎へん爲に僕どもを遣はさ  
んとて言ふ、わが饗應すでに備はりたれば婚宴に來れと招き置きたる者に言へ。

天國なるキリスト教は、恰も臣下が王子の婚宴に招かれて其光榮に浴するが如くである、王  
なる神は饗應の飲食物としてキリストの肉と血をこのへて、兼て招き置きたるユダヤ人

を招き給ふた、キリストの肉と血は神の怒をなだめ、罪人の罪を赦して神人と合を來す人

問心靈上の飲食物である。

然るに人々顧みずして、或者は己が畑に、或者は己が商賣に往けり、また他の者は僕どもを執  
へて辱しめかつ殺したれば。

人は各々其職業をつとむる事は大切なるも、王子の婚宴に招かれて其光榮に浴する事は最  
上の幸福である、神は兼ねてユダヤ人に此の幸福を得させんとて招き置き、今使者を以て  
更めて招き給ひしも來ることを好まず、且神の僕どもを殺した、かゝる人は物質界の享樂  
に満足せんと思ふ者である、然れど物質界の享樂に満足せぬ者あり、かかる人は神人の交際  
によれる天上無窮の光榮を渴望する者である。

王、怒りて軍勢を遣し、かの殺せる者を滅して、其町を焼きたり。

神の懇切なる招待をも觀みず、且神の僕どもを殺せしユダヤ國民は、神が軍勢を以て亡ぼ  
し給ふとの預言である。

斯て僕どもに言ふ『婚宴は既に備りたれど、招きたる者どもは相應しからず、然れば汝ら街に



行きて遇ふほどの者を婚宴に招け』僕ども途に出でて善きも悪しきも遇ふほどの者をみな集め  
たれば、婚禮の席は客にて満てり。

ユダヤ人は客となるに不適當の者となりたれば恵みの時は鎖された、街に出でて遇ふ程の  
者を招くと異邦人の救の日が開かれた。

王、客を見んとて入り來り、一人の禮服を著けぬ者あるを見て之に言ふ『友よ如何なれば禮服  
を著けずして此處に入りたるか』かれ黙しむたり。

禮服を著ぬ者とは(創三章二十一節)キリストの犠牲の巧徳のありがたき事を辨へざる者  
を言ふ。

こゝに王、侍者らに言ふ『その手足を縛りて外の暗黒に投げいさせ、其處にて哀哭、切齒する  
ことあらん』それ招かるゝ者は多かれど、選ばるゝ者は少し。

神の招きに應じて來る者は多けれど、神の選ひにとまる者即ち禮服を著たる者は少しと。

### 太二十一章十七節—二十二節 カイザルの物と神の物

パリサイ人とヘロデともがらと相謀り來り、イエスに質問して言ふ『貢をカイザルに納むるは  
善きか悪きか』。

當時ユダヤ國はローマの屬國なれば人頭税銀三十を納むる事であつたが、外國黨のヘロデ  
黨はこれは當然であると言ひ、愛國黨のパリサイ宗は神の撰民は神に献金せば足ると言  
ふ、此の二黨が共謀して納税に就いてイエスを試みたのである、もしイエスが貢をカイザ  
ルに納むるは善しと言ひ給へば、愛國黨はイエスを賣國奴として愛國黨に訴へ、もし貢を  
カイザルに納むるは悪しと言ひ給へば、外國黨はイエスを反謀人としてローマ政府に訴へ  
んと考へたのである。

イエスその邪曲なるを知りて言ひたまふ『偽善者よ、なんぞ我を試むるか、貢の金を我に見せよ  
』彼らデナリ一つを持ち來る、イエス言ひ給ふ『これは誰の像、誰の號なるか』彼ら言ふ『カ  
イザルのなり』彼らに言ひたまふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』  
彼ら之を聞きて奇とし離れて去り往けり。

イエスはデナリ一つを持ち來らしめ、此の肖像としるしは誰れなるやと問ひ給ふた、彼ら



答へて言ふ『カイザル皇帝の肖像と其處名なりとイエス言ひ給ふ、カイザルより出せし金はカイザルに歸しユダヤより出せし金は神に納めよ。』

### 太二十一章二十三節—二十三節 復活の説明

復活なしと言ふサドカイ人ら、其日、御もとに來り問ひて言ふ『師よ、モーセは、人若し子なくして死なば、其兄弟彼の妻を娶りて兄弟の爲世嗣を擧ぐべし』と言へり、我らの中に七人の兄弟ありしが兄娶りて死に、世嗣なくして其妻を弟に遺したり、其二、其三、其七まで皆かくの如く爲し、されば復活の時其婦は誰の妻になるべきか。

サドカイ人は人間の甦へりとは、元の肉体に甦へる事なれば男女の關係もあると思ふた。

イエス云ひ給ふ『汝等は聖書をも神の能力をも知らざるにより、誤れり夫人の甦へる時は娶らず稼かず天使の如し』。

イエスは彼等が聖書の智識もなく、神の全能をも信せぬ爲に斯く誤れりと。

死にし者の甦へる事に就ては、神が汝等に告げ給ひし事を未だ讀まざるか、神モーセ云ひ給ふ

我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと、然らば神は死にし者の神にあらず、生ける者の神なり。

世あらたまりし時に甦へるは、肉体でなく天使の如く自由なる靈体なれば男女の關係なしと神は靈魂と肉体と死にし者を甦へらしめ給ふでなく、神を信じ、生命を得て正道を歩みつゝある者は肉体を失ふも神の前に生くれば、生ける者の神はこれを甦へらしめ給ふのである、故にイエスは我はアブラハムの神なりと(出三章二節)の聖言を引きてアブラハムか神の前に生ける事を示して、復活を説明し給ふた。

### 太二十三章二十七節—二十九節 イエスの歎息

あゝエルサレム、エルサレム、預言者達を殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の其雛を翼の下に集むる如く我汝の子供を集めんと爲す事幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき。

イエス城中を見て、これが爲に哭き言ひ給ふ、あゝ汝、汝等もし汝等が此恵みの日に汝らの平安にかかはる救を知られらんには福なるに、好まざるが故に今汝らの目に隠れたりと



(路十九章四十一節四十二節)

視よ、汝らの家は廢てられて汝らに遺らん。

敵が汝らの周圍に壘を築き四方より圍み攻め、汝ら其中にある兒女を撃滅し、石をも石の上に残さざる日來らん是汝を觀み給ふ時を知らざるによると(路十九章四十三節四十四節)我汝らに告ぐ『讚むべきかな主の名によりて來る者』と汝らの言ふ時の至るまでは、今より我を見ざるべし。

彼らの目が醒めて神より來る者は我救主にして讚むべきかなと、汝等の言ふ日の來るまでは救主を見出さざるべしと。

### 太二十四章一節—二節 エルサレム滅亡の預言

イエス殿を出で往き給ふ時弟子達殿の建物を示さんとして御許に來りしに、答へて言ひ給ふ『汝ら此の一切の物を見ぬか、誠に汝らに告ぐ、此處に一つの石も崩されずしては石の上に遺らし』弟子らはユダヤ人を始め、萬國民の崇拜する美麗を極めた此の壯嚴なる宮殿が、荒地となる

とは思はれねば、イエスに來りて言ふ、見給へ此らの石、此らの建物如何に壯嚴ならずやと(可十三章一節)イエス言ひ給ふ、汝ら此のすべての物を見ぬか、宮殿も石垣も破壊せられて荒地となると弟子らは目に見ゆる皮層を見、イエスは目に見へざるユダヤ國民の心霊を見給ふた。(母十六章七節)

汝ら預言者ダニエルによりて言はれたる『荒す惡むべき者』の聖なる處に立つを見ばその時ユダヤに居る者共は山にのがれよ、屋の上に居る者は其家の物を取らんとして下るな、畑に居る者は上衣を取らんとて歸へるな、それ死體のある處には驚あつたらん。

ダニエルの預言に言ふ、都城を荒す惡むべき敵が軍旗を聖都に建つる日が來ると(但九章二十七節)イエス言ひ給ふ、これを見たならば此日は神がユダヤ民族を罰し給ふ日なれば速に聖都を立ちのけ、必ずロトの妻に倣ふな、死體のある處とは腐敗せる民族のある處で驚のあつまるとは神の刑罰が降ると言ふ事である。

### 太二十四章二十九節—三十一節 主の再臨



日は暗く、月は光を發たず、星は空よりおち、天の萬象ふるひ動かん、其時人の子の兆、天に現はれ、地上の諸族みな嘆き哀しみ、かつ人の子の能力と大なる榮光とを以て天の雲に乗り來るを見ん。彼は使達を大なるラツバの聲とともに遣して天の此の極より彼の極まで四方より選ばれし者を集めん。

世を審かんとて主が來り給ふ時、地上の諸族はなげき哀しみ、選ばれし者は迎へられて天上無窮の幸福に入れらる。

太二十五章一節—十三節 智き童女と愚なる童女

天國は燈火を執りて、新郎を迎へに出づる十人の處女は比ふべし、その中の五人は愚にして五人は慧し、愚なる者は燈火をとりて油を携へず、慧きものは油を器にいれて燈火とともに携へたり、新郎遅かりしかば皆まどろみて寝ぬ、夜半に『やよ新郎なるぞ出で迎へよ』と呼ばる聲す、こゝに處女みな起きてその燈火を整へたるに、愚なる者は慧きものに言ふ『汝らの油を分け與へよ、我らの燈火きゆるなり』慧きもの答へて言ふ『恐らくは我らと汝らとに足るまじ、

寧ろ賣る者に往きて已がために買へ、彼ら買はんとして往きたる間に新郎きたりたれば、備へをりし者どもは彼と共に婚宴に入り、而して門は閉されたり、その後かの他の處女ども來りて『主よ主よ我らの爲にひらき給へ』と言ひしに答へて『誠に汝らに告ぐ我は汝らを知らず』と然れば目を覺しをれ、汝らは其日、其時を知らざるなり、

新郎はキリストで、處女は信者で、油は聖靈で、油を賣る者は神である、新郎を迎ふる智き處女はいつも燈火を燃して居たれば樂しき婚宴に入ることを得た、我等は主の來り給ふ其日、其時を知らざれば何時も聖靈を受けて主の榮光を輝かして主と共に天國の興宴に入らねばならぬ、

太二十五章十四節—二十節 忠實の僕と不忠實の僕

天國は或る人遠く旅立せんとして其僕どもを呼び、之に已が所有を預くるが如し。各人の能力に應じて或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラント、を與へ置きて旅立せり、五タラントを受けし者は直ちに往き之をはたらかせ他に五タラントをまうけ、二タラント



を受けし者も同じく二タラントを儲く、然るに一タラントを受けし者は往きて地をほり、その主人の銀をかくし置けり。

ある人はキリストで、僕は信者で、所有は聖言で、旅行は昇天で、来るは再臨で、計算は審判で、利益は救はれし人を云ふ、イエスは三人の者に其力に應じて聖言を授け、これを働かせて人を救に導く事を命じて昇天し給ふた。

久しうして後この僕どもの主人きたりて、彼らと計算したるに五タラントを受けし者は他に五タラントを持ち來りて言ふ『主よなんぢ我に五タラントを預けたりしが、視よ、他に五タラントをもうけたり』主人言ふ『宜いかな、善かつ忠なる僕、汝は僅かなる物に忠なりき、我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜に入れ』二タラントを受けし者きたりて言ふ『主よ、汝われに二タラント預けたりしが、視よ他に二タラントを儲けたり』主人言ふ『宜いかな善かつ忠なる僕、汝は僅かなる物に忠なりき、我れ汝に多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜にいれ』

イエス再臨の時、第一の者も第二の者も賞讃を受けた。

又一タラントを受けし者もきたりて言ふ『主よ我は汝の嚴しき人にて、播かぬ處より刈り、散らさぬ處よりあつむることを知る故に、懼れてゆき汝のタラントを地にかくしおけり、視よ汝はなんぢの物を得たり』主人答へて言ふ『惡しく、かつ惰れる僕、わが播かぬ處より刈り散らさぬ處よりあつむることを知るか、さらば我が銀を銀行にあづけ置くべかりしなり、我きたりて利子と共に我が物をうけ取りしものを、然れば彼のタラントを取りて十タラントを有てる人に與へよすべて有てる人は與へられて愈々豊ならん、然れば有たぬ者はその有てる物を取るべし而して此の無益なる僕を外の暗黒に逐ひいだせ其處にて哀哭切齒することあらん。

第三の者は主の恩を思はず、主を愛する心もなく、主より預りたる銀を土中に隠し置き、然して己が不忠怠慢を反省せずして却て主に罪を負せて言ふ、汝は嚴しき人なればわれ恐れて彼の銀を土中に隠し置けりと、有てるとは其物の効能を發揮すること、有たぬとは其物の効能を發揮せぬ事である、又銀行にあづくるとは説教も傳道も出來ぬ者は聖言を實踐して神の愛をあらはし苦難に忍耐して主の榮光をあちはすことである。



## 太二十六章六節—十三節　マリヤの報恩

イエス、ベタニヤにて癩病人シモンの家に居給ふとき、ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ちて、近づき來り食事の席に就き居給ふ、イエスの首に注げり、弟子たち之を見ていきどほり言ふ『何故かく濫なる費を爲すか、之を多くの金に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』。

マリヤは已か救はれし恵と、ラザロが甦らせられし鴻恩の萬分の一なりとも報んとて、印度産なる價高き香膏ナルドを贖求して携へ來りイエスに注いだ、是はユダヤ人が貴賓を禮遇する式であつた、弟子たちはこれを浪費と思つてとがめたのである。

イエス之を知りて言ひたまふ『何ぞこの女を惱すか、我に善き事をなせるなり』貧しき者は常に汝等と偕にをれど、我は常に偕に居らず、この女の我が体に香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせるなり、誠に汝らに告ぐ全世界、何處にてもこの福音の宣傳へらるゝ處には、この女のなし、事も記念として語らるべし』。

イエス弟子等を責めて云ひ給ふ『何ぞ此婦を惱すや、彼は感恩の情に溢れて善き事を爲したのである、貧者は常に汝等と共にあればいつでも施す事を得る、然れど我は常に汝等と共にあらず、此婦の爲せし事は記念として何れの處にても福音と共に傳へらるると。』

## 太二十六章二十節—二十五節　ユタに於けるイエスの歎き

日暮れて十二弟子と共に席に就きて、食するとき言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人、われを賣らん』弟子たち甚く憂ひて、おのれの『主よ我なるか』と言ひしに。

イエスは食事の席上に於て沈痛の態度にて嚴肅に汝らの中一人我を賣る者あると言ひ給ふた、弟子らは各自分が疑はれては居らないかと心配して主よ我なるか我なるかと言つた。答へて言ひ給ふ『我と共に手を鉢に入る、者われを賣らん、人の子は已に就きて録されたる如く逝くなり、されど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』イエスを賣るユダ答へて言ふ『ラビ、我なるか』イエス言ひ給ふ『汝の言へる如し』。

共に手を鉢につくるは親愛の意である、イエスは自分の親愛する者が自分を敵に賣る、自分は



神の計畫し給ふ如く往く、然れど親愛するユダが自ら招きし罪の報を思ふならば、彼は此世に生れぬが幸であつたとユダの爲になげき給ふた。

### 太二十六章二十六節—二十節 聖晚餐式

彼ら食しをる時イエス、パンを取り、祝してさき弟子達に與へて言ひ給ふ『取りて食へ、これは我が体なり』酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ『汝らみなこの酒杯より飲め、これは契約のわが血なり、多くの人のために罪の赦を得させんとて、流す所のものなり』われ汝らに告ぐ『わが父の國にて新らしきものを汝らと共に飲む日まで、われ今より後この葡萄の果より成るものを飯まじ』

律法を守る者は神が恵み給ふとの契約を固める爲に、獸血を注ぐが舊約で、神があわれんで罪人の罪を赦し給ふとの契約を固める爲にイエスが血をそゝぎ給ふが新約である、故にイエスは新約のわが血にして罪を赦さんとして多くの人の爲に流すと言ひ給ふた(耶三十一章三十三節三十四節)イエスはパンを以て己の肉のたとひとし、葡萄酒を以て己の血の

たとひとして聖晚餐式を立てて言ひ給ふ、此のパンと此葡萄酒を飲食する毎に、わか汝らの爲に肉を裂き血を流せし事を記念して感謝せよと(哥上十一章二十三節二十六節)父の國に於て新しき物を飲むとは、靈界の交際を言ふ、葡萄につくられたる物を飲ますとは物質界の交際はこれが終りであると言ふ事である

### 太二十六節三十六節—四十六節 ゲツセマネの祈

イエス彼らと共にゲツセマネと言ふ處にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ『わが彼處にゆきて祈る間、汝ら此處に座せよ』斯てペテロとゼベダイの子二人とを伴ひゆき憂ひ悲しみ出でて言ひ給ふ『わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり、汝ら此處に止りて我と共に目を覺しをれ』少し進みゆきて平伏し祈りて言ひ給ふ『わが父よもし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ、されど我が意の儘にとにあらず、御意のまゝに爲し給へ』

イエス祈り給ふほど憂ひが増して哀しみに沈み死ぬるばかりになり給ふた、これは一點の罪なき聖き神の子が罪人の汚れし罪を身に負ひ給ふ苦痛の爲であつた、イエスは此時難産



に臨みし婦人が自ら助からんと欲せば、子を死に付さねばならぬ、子を助けんと欲せば自ら死なねばならぬと言ふが如き苦痛に陥り給ふた、故にわれにかゝる苦痛なくして、罪人が救はるゝ途あらば、其途を開き給へ然しわが思ふままを爲さんとはせぬ、聖意を成就爲し給へと祈り給ふた。

弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテロに言ひ給ふ『汝ら斯く一時も我と共に目を覺し居ること能はぬか。誘惑に陥らぬよう目を覺し、かつ祈れ、實に心は熱すれども肉體よわきなり』又二度ゆき祈りて言ひ給ふ『我父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば御意のまゝに成し給へ』復來りて彼らのねむれるを見たまふ、是その目疲れたるなり、又離れ行て三度同じ言にて祈り給ふ、而して弟子たちの許に來りて言ひ給ふ『今はねむりて休め、視よ、時近づけり人の子は罪人らの手に付さるるなり、起きよ我ら往くべし、視よ我を賣るもの近づけり。

イエスは三回も同じ事を祈り給ひしも、神は苦痛の酒杯を離す事は聖意にあらねば、天使を以て苦痛に打ち勝つ能力を與へ給ふた(路二十二章四十三節)又イエスは弟子らの許に來り、今は目を醒して祈るべき機會は過ぎ去つた、起きよ、われら往くべし。

## 太二十六章四十七節—五十節

### イエス捕わる

視よ十二弟子の二人なるユダ來る、祭司長、民の長老らより遣されたる大なる群衆、劔と棒とをもちて之に伴ふ、イエスを賣る者あらかじめ合圖を示して言ふ『我が接吻する者はそれなり之を捕へよ』かくて直ちにイエスに近づき『ラビ安かれ』と言ひて接吻したれば、イエス言ひ給ふ『友よ何とて來る』このとき人々すゝみてイエスに手をかけて捕ふ。

接吻は親愛の情を現す挨拶で、ラビは先生と言ふ事である、ユダは此挨拶と尊敬する形容を以てイエスを敵に賣つた、表面親愛の挨拶や尊敬する形容を爲して、裏面己の利を謀る者は此のユダの如き者である。イエスは此卑劣なる所業を爲すユダに對して、怒り給ふことなく沈着の態度と靜肅なる心を以て、友よ何とて來るかご從容として縛につき給ふた。

### (可十四章四十九節)

視よ、イエスと偕に在りし者のひとり手をのべ、劔を抜きて、大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり、イエス彼に言ひ給ふ『汝の劔をもとに収めよ、すべて劔をとる者劔にて亡ぶるなり



我が父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるること能はずと思ふか、もし然せば斯くあるべく録したる聖書はいかで成就すべき』

イエスは今天父に請ふて天軍を得て、敵に勝ち給ふ事は容易なるも、聖書の豫言か成就する事が聖意なれば、ペテロを責めて剣をさめしめ、且敵に向ひて温和なる言にてこれにて赦せど彼らの心をなだめて僕の耳を癒し給ふた。(路二十二章五十一節)

### 太二十六章六十一節—六十六節 カヤバの審判

大祭司起つてイエスに云ふ『此人々が汝に對して立つる證據に何を答へぬか』されどイエス黙し居給ひたれば、大祭司言ふ『我汝に命す活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリスト神の子なるか』イエス言ひ給ふ『汝の言へる如し、且我汝らに告ぐ、今より後汝ら人の子の全能者の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん』大祭司已が衣を裂きて云ふ『彼瀆言を云へり何ぞ他に證人を求めん、視よ汝ら今この瀆言を聞き、いかに思ふか』答へて言ふ『彼は死に當れり』イエスは已の神の子なる事を證し給ふのみならず、今より後、天に昇り全能者の右に坐し

て罪人の爲に仲保をなし、又世を審く爲に天の雲に乗りて來ると預言し給ふた、然るに彼らは人にして神の如く言ふ者は、神を瀆す大罪人なれば死にあたると判決した。

夜明になりて凡ての祭司長、民の長老らイエスを殺さんと相議り、遂に之を縛り曳きゆきて總督ピラトに付せり。

神はユダヤ民族を選びモーゼを以て宗教を授け、已の榮光を現さしめんと爲し給ひしも失敗に終りたれど、尙見捨給ふ事なくイエスを救主として降し給ふた、然るに彼らはユダヤをローマの屬國より救ひ出して獨立國を建て、世に榮華を誇る事を得る救主を望みたれば謙り罪を悔改めて受けねばならぬ、救主は好まざれば、ピラトの手に渡してしまつた(約一章十一節)。

### 太二十七章二十節—二十二節 パラバ赦さる

祭司長、長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡さんことを勸む、総督答へて彼らに言ふ『二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか』彼ら言ふ『バラバなり』ピラト言



ふ『さらばキリストと稱ふるイエスを我いかに爲べきか』皆言ふ『十字架につくべし』。

群衆は神の子を憎んで、此人を除け、バラバを愛してわれらに赦せと言つた、斯く光を憎んで暗きを愛するは己が行爲の悪しきによる(約三章十九節)。又此日カリバリ山上に三本の十字架が建られた、其中の十字架はバラバがかけらるゝ、予定であつたが俄にイエスが代り給ふてバラバが赦された(太二十章二十八節)、此バラバは罪人なる我れらと知れ。

### 太二十七章三十二節 シモンの十字架

その出づる時、シモンと云ふクレネ人にあひしかば、強いて之に十字架をおはしむ。

シモンは突然イエスに遇ひたればいやながらも強いてイエスの十字架を負せられた此時彼は恥かしくもあり、苦しくもあれば不運に遭遇したと歎きしならん、然れど神はイエスの十字架を負ひし報酬として彼の名を生命の書に録して永遠に傳へ給ふた(羅八章十七節下旬)

### 太二十七章四十六節 十字架上イエスのさげび

三時ごろイエス大聲に叫びて『エリ、エリ、ラマ、サバクタニ』と言ひ給ふ、我が神、我が神なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。

イエスは常に天父と共に在りて慰めと喜びと力を受けて働き給ひしが(約八章二十九節)此時人類の罪がイエスの一身にあつまりたれば、暫時イエスは天父との交通が絶へた故にイエスはわが神わが神何ぞわれを捨て給ふやと叫び給ふた。

### 太二十七章五十一節 イエスの死

視よ聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震ひ、磐さけ、墓ひらけて、ねむりたる聖徒の屍体おほく活きがへり。

イエスの死によりて起りしこと四つ、第一はエルサレムの宮殿の聖所と至聖所の間にある幕は罪人は至聖所に入るを許されぬ事を示されたのである、然るにイエスの死によりて此幕が裂け罪人も至聖所に入る途が開かれたことである、第二は地震は神の審きてイエスの死によりて審きが始まつた、即ち信する者は救はれ、信せぬ者は罪に定めらるゝ事である



(可十六章十六節)第三はイエスの死によりて磐の如き頑固な罪人の魂が、くだかれて神を受け入るゝやうになつた事である、第四は悪魔が死の權威を有つて罪人を墓の中に閉ぢ込めたるもイエスは死を以て、死の權威を有てる悪魔の力を亡ぼし給へたれば(來二章十四節)墓が開けて聖徒が甦つたことである。

### 太二十七章五十七節—六十節 イエスの埋葬

日暮れて、ヨセフと言ふアリマタヤの富める人きたる、彼もイエスの弟子なるが、ピラトに往きてイエスの屍体を請ふ、こゝにピラト之を付すことを命ず、ヨセフ屍体をとりて淨き亞麻布につゝみ、岩にほりたる已が新しき墓に納め墓の入口に大なる石を轉しおきて去りぬ。

イエスが十字架につけられ給ふや、弟子らは皆イエスを捨てて逃げ去つた、然るに神はイエスを葬る必要を認め給へば、平素ユダヤ人を恐れて、ひそかにイエスの弟子となれるアリマタヤのヨセフ及び世間をはゞかつて、夜イエスに來りしニコデモに大膽なる信仰を與へて現れ出でしめ丁寧にイエスを葬り給ふた(約十九章三十九節)。

### 太二十八章九節—十節 イエスの復活

視よイエス彼らに遇ひて『安かれ』と言ひ給ひたれば進み行き御足を抱きて拜す、イエス言ひ給ふ『懼るな、往きて我が兄弟たちにガリラヤにゆき、彼處にて我を見るべき事を知らせよ』イエスが甦りて弟子に遇ひ給ひしは此時が始めてであつた次はシモンに現れ給ふた(路二十四章三十四節)、第三はエマオの途上にて二人の弟子に現れ給ふた(全二十五節三十一節)、第四は弟子に現はれて手と足を示し給ふた(全三十六節—四十三節)第五はトマスに現れて汝の手を我が脇にさせと云ひ給ふた(約二十章二十六節)、第六はテベリヤの海邊にて弟子等に現れ給ふた(約二十一章五節—二十二節)、第七はカリラヤにて十一の弟子に現れ給ふた(太二十八章十六節—二十節)。

### 太二十八章十八節—二十節 世界傳道

イエス進みきたり、彼らに語りて言ひ給ふ『我は天にても地にても一切の權を與へられたり、



然れば汝ら往き、てもろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命せし凡ての事を守るべきを教へよ、視よ我は世の終りまで常に汝らと偕に在るなり』。

イエスはユダヤ民族の系統に肉体を受けて出現し給へば、先づユダヤ民族に對する使命を帯び給ひしが（太十章六節全十五章二十四節）、肉体を離れて靈体を受け給ひたれば世界に對する使命を帯び給ふた、故に傳道の區域が世界となり、其目的が萬國民となつたのである、傳道の方法はイエスの命令を教へて之を守らしむる事である、傳道は至雅の働きのなれどイエスが働く者の中に在して共に働き給へば、我らの凡て求むる處思ふ處よりも甚く勝れる事を爲し給ふ、願くは榮光世々彼に歸して限りなからん事を、アーメン。

昭和九年九月十日印刷  
昭和九年九月十八日發行

(定價貳拾錢)

基 督 教  
馬 太 傳 福 音 書 靈 解

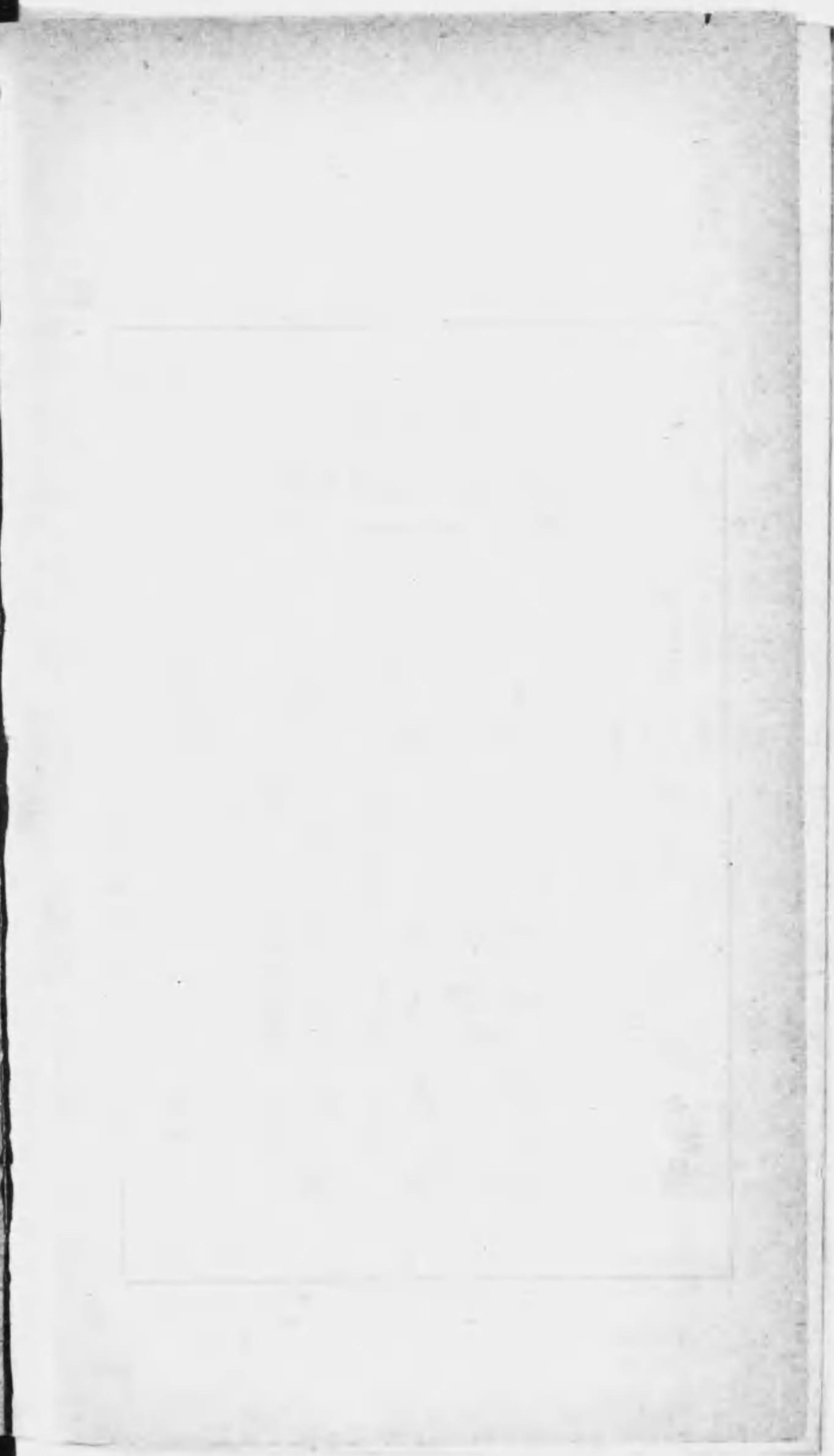
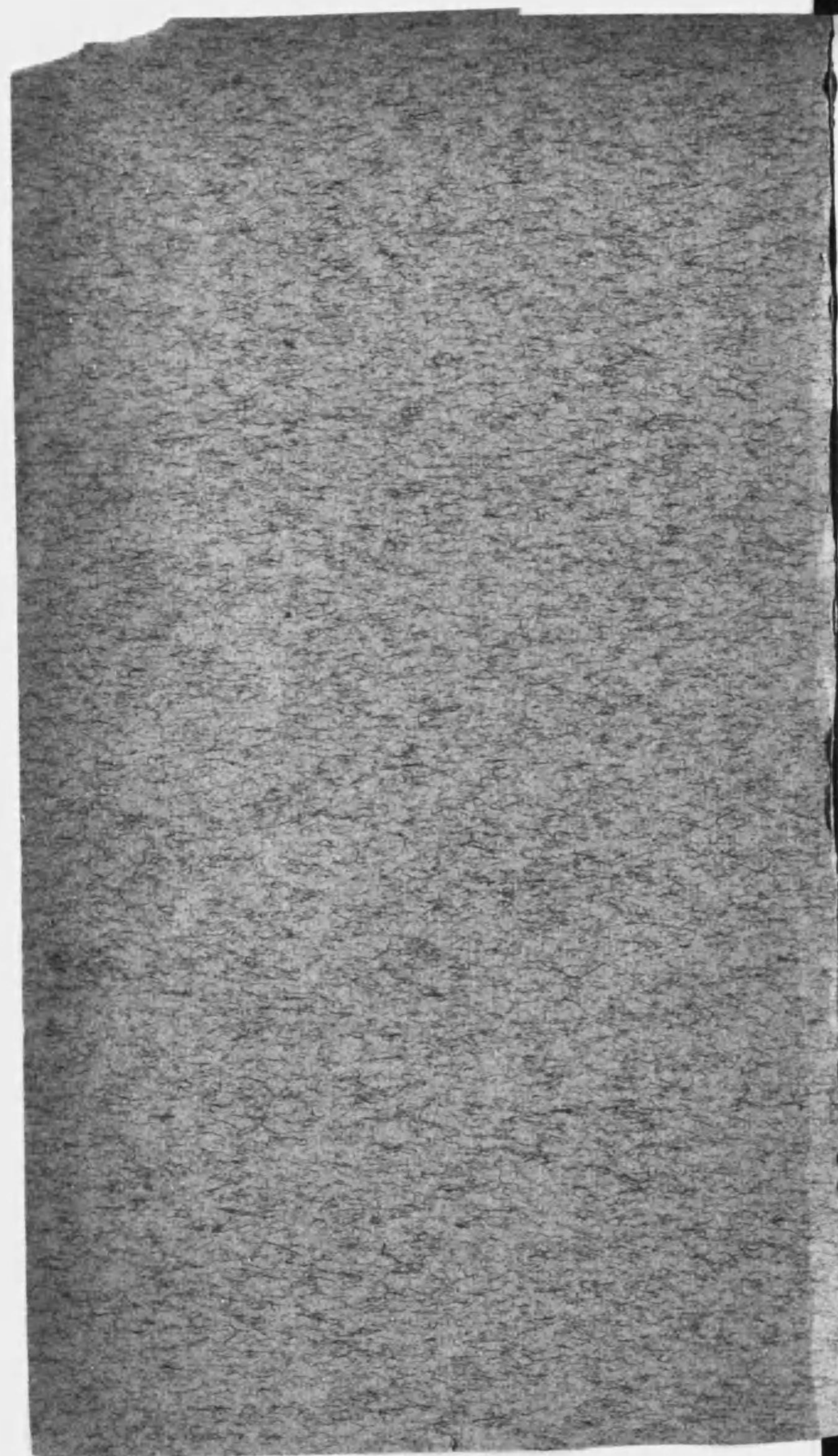
著作兼 發行者 足 立 文 太 郎  
島根縣能義郡廣瀬町大字廣瀬八〇三番地

印刷者 岩 田 清 兵 衛  
島根縣能義郡廣瀬町大字廣瀬九九七番地

印刷所 岩 清 印 刷 所  
島根縣能義郡廣瀬町大字廣瀬九九七番地

發行所 廣 瀬 基 督 教 會 所  
島根縣能義郡廣瀬町大字廣瀬八四九番地







終

9  
3